

815

Mo 12

(M)

文學博士芳賀矢一批評  
文學士岡田正美校閱

宮脇郁著

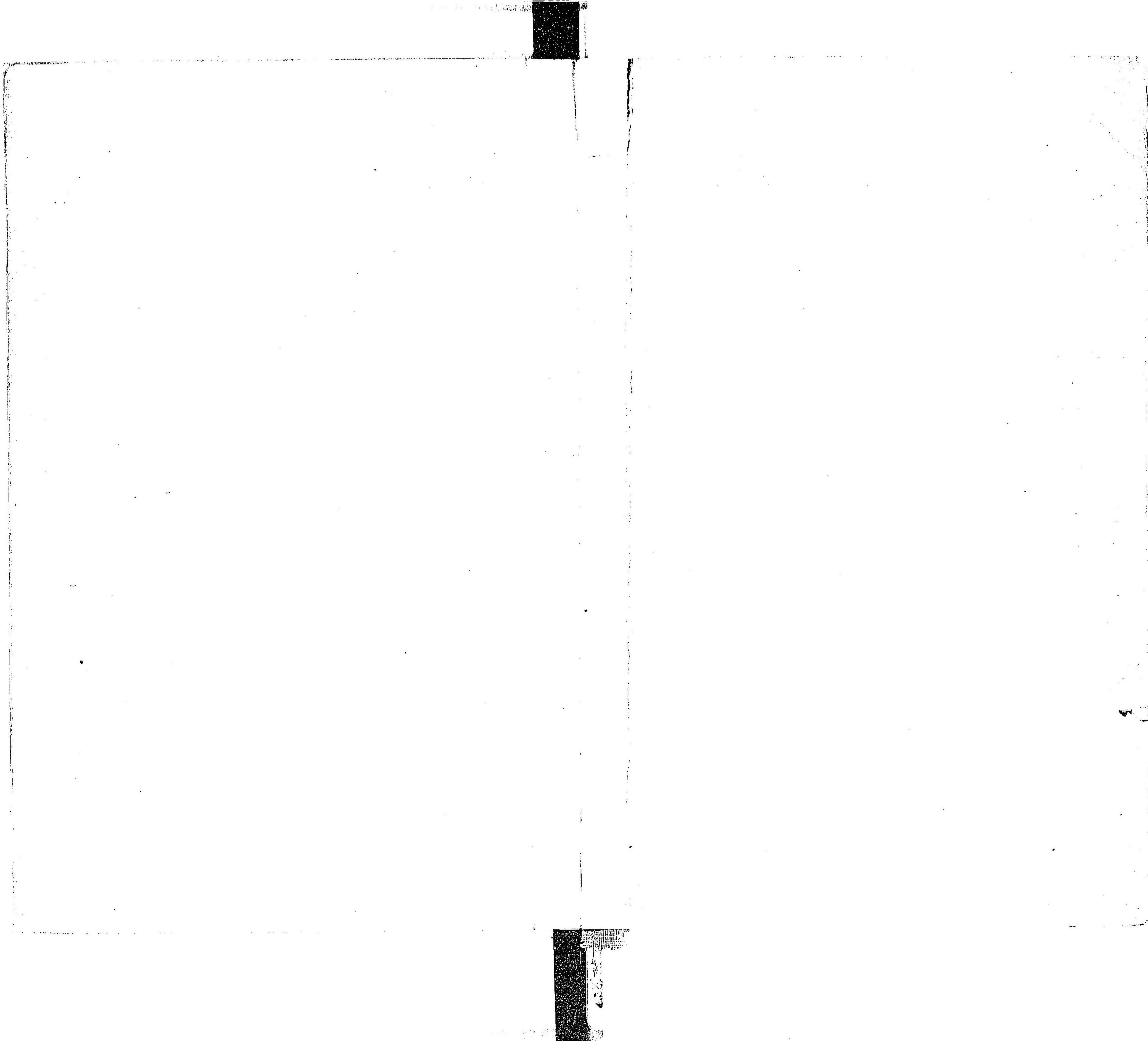
# 論理的日本文典大意

東京  
大阪

參文舍  
積文社

發行







進上

精閱者

論理的日本文典大意

文學博士芳賀矢一批評  
文學士岡田正美校閱

宮脇郁著

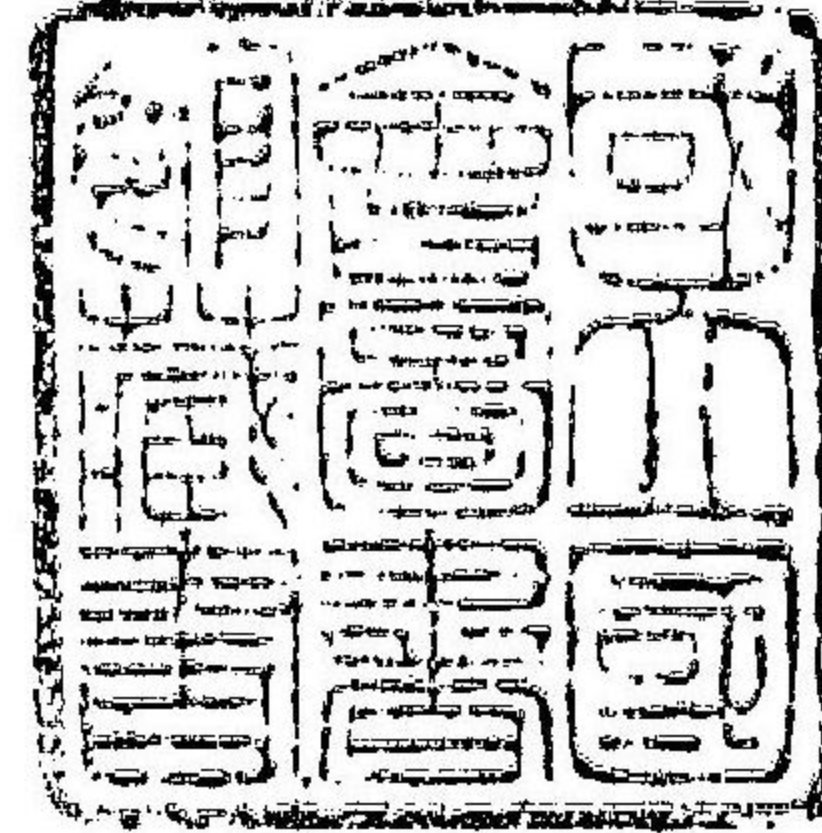
東京  
大阪

參文舍  
積文社

發行



815.M661a



337131

序

國語法の攻究は徳川時代の國學者の研究以外には未だ幾何の進歩をも示さざるなり。維新以後外國文法との比較研究始りたれども、寧ろ單に彼の形式に模倣したるに過ぎず、言語學上系統を異にせる國語に向つては、必ずや特殊なる語法を組織する一隻眼なかるべからず。

友人宮脇郁氏は國語研究に於ては多大なる興味を有せる人なり。頃日、本書を懷にして余が居を叩き、余の意見を徵せらる。余通讀一過、未だ悉く氏の説に首肯せず



と雖も、國語の特性に就きて注意を促せる點多きを見、世に氏の如き熱心なる新研究者あるを欣び、又氏が研究のいよいよ積んで、他日の大成を期せんことを望む念切なり。氏の請にまかせて、欄外の批評を加へ、併せて茲に一言を記す。

明治三十八年九月

芳賀矢一しるす

論理的日本文典大意脱稿しぬ、校閲して給へ、又序文を書きて添へて給へ、とて草稿を送りおこされぬ。通讀して、注意すべき點をば注意し、意見を述べべき處には意見を書き添へて、さて、序文は、書くべきこといふべきことなければ、書かず、と書いて、草稿を送り返しぬ。然るに、折り返して、しひて序文をといひておこされぬ。數日經て、著者上京せられて、また序文を乞はるゝことしきりなり。是に於て、辭すること能はずして、筆を執りぬ。さて、しひて案ずるに、

一 論理的日本文典といふ名稱、如何あらん。定めて物議をひき起すなるべし。さもあらばあれ、學に心篤き人はかゝる枝葉



の末はとがめじ。

一予が説を採られ、又予を推奨せられたること餘りなり。私かに赧顔に堪へず。

一著者は拙著日本文法文章法大要并に、解説批評日本文典に重きをおかれすぎたる嫌あり。されども、是には故あるべし。予の著者を知りしは今より凡五年許前、著者の福知山中學に在職せられし頃なりき。而して、予の始めて著者にあひしはこの七月の二十日なりき。著者の予の指教を受けたりといはるゝは此五年來の手簡の往復に依りしものにして、その數凡そ百餘通に及び、之を合綴せば優に一冊の書となり

ぬばかりなりしよしなるが、不幸にして祝融の災に依りて、一朝にして此等凡て灰燼となり了りぬとぞ。されば、著者の、今回此稿を起さるゝに當りて、予の説として明言し得らるべきものは前記の二書の外には殆んど皆無なりしが故に、止を得ずして、かの二書をばうるさきまでに引用せられぬと見えたり。

一此項は岡田文學士の創見云々等の文字餘にうるさきやうなり。されども、是互に累を及ぼさじとの著者の周到なる用意に出でたるものなるべし。

一文典を批評するもの、やゝもすれば、著者のとりおとしたる



誤謬を指摘する等瑣細なる枝葉に汲々として、その材料の完備不完備、學說の穩當不穩當又は矛盾撞着等の重要なる根本を逸するもの多し。歎ずべきことなり。批評眼の高く且つ大ならんことを望むこと切なり。

一 破壊的批評は極めて易く、構成的批評は極めて難し。學に心篤く且つ忠實なるものは須らく、易を捨て、難をとるべし。是を以て序とす。

明治三十八年八月十日

岡 田 正 美

緒 言

一 本書は従來の日本文典に準據して記述せるものにして、一般に是認せられたる事項に對しては解説せざるものもあり、要は唯、その不十分なる點に向つて、多少の卑見を加へて、前者の缺を補はんとするにあり。

一 余が研究は、年來岡田文學士によれるを以て、同學士の說の既に世に公にせられたるもの言ふに及ばず、未だ公にせられざるものをも、また余が同學士に就きて研究したるものをも、本書中に採録せり。されば、本書は著作といはんより、むしろ編纂といふを適當とすべきか。

一 本書は、たい大綱を擧ぐるのみにして、他の細目に涉りたるものは、すべて別著に譲ることとせり。故に世間に流布せる文法書中に收めたる普通の事項は省略せるもの多く、岡田文學士の創說の如きも、細説せざるものあり。

一 本書に説くところは、皆て出版せし拙著「日本文典講義」の所說に對しては、何等の關係を有せず。



一本書を讀まんとするものは、一わたり日本文典と了解せるものならんことを要す。然らずんば、彼我の意見の存するところを知りがたければなり。

一本書の所説に對しては、讀者諸君の高批を寄するに吝ならざらんことを切望す。諸君の批正を得て、他日わが國文典の完成を期せんことは、余が多年の宿望なればなり。

一本書を公にするに方りて、芳賀博士には、嚴正なる批評を、岡田文學士には、緻密なる校閲を辱し、爲に本書の面目を生ずるに至れり。これ、余が謹みて謝するところなり。唯、余が研究、日なほ淺くして、文法の要領を看破すること、能はざるのみならず、非才不文なる、その胸臆を十分に發揮すること、能はざるは、深く遺憾とする所なり。庶幾くは、今後、日夜汲々研究に従事し、以て他日の成功を期せん。

明治三十八年九月一日、東京の客舎に於て、

宮 脇 郁 謹 識

### 論理的日本文典大意目次

#### 品詞篇

品詞緒論	一
名詞	五
代名詞	九
指詞	一〇
動詞	一三
存在詞	二二
形容詞	二四
特別形容詞	二七
準形容詞	二九
狀態詞	三一



數詞	三四
添詞	三七
特別添詞	四〇
副詞	四二
助動詞	四七
助詞	五四
接續詞	五七
轉接詞	五九
感歎詞	六三
體言用言	六五
本類轉類	六八
單語	七一
熟語 連語疊語	七二
接頭語接尾語	七三

文章篇

文章法緒論	七八
文	七九
文の成分	八二
言	八二
句	八三
節	八四
主語述語	八七
客語	八九
補語	九〇
客語と補語との辨	九二
修飾語	九九
提部	一〇一



副部	103
想部	106
發端部	107
呼部	109
文の種類	110
單文	112
複文	114
連文	117
正文文	119
感歎文	127
係結法の規定	128
文の解剖	130

### 論理的日本文典大意

文學博士 芳賀矢一 批評  
 文學士 岡田正美 校閱  
 宮脇 郁 著

### 品詞篇

#### 品詞緒論

既往に於て一定せられしことは、その何たるを問はず、たとひ不便あり、不利ありとも後に至りて容易に之を打破することを敢てせず、不便不利は目前に感じながらも、枉げてこれに準據せんとするは、人心の慣習的惰力に制せらるゝ所以にして、人情の弱點、全くこゝに存す。吾人は今日、我が文法界に於て、この弊の最も甚しきものあるを認む。



芳賀博士云、品詞の區別は古羅文法に準ぜること論なく、今日の歐羅巴語にもよく適合せりとはいふべからず。然れども慣用の久しき、かつは古文學の廢せられざる今、比較の必要もあり學習の便利もあれば、彼國にも其儘に用ゐられ居るなり。我國語を教授する際、於ても、現今は各種の歐羅巴語をも併せ教ふべき時世なれば、姑く舊慣習に従はんこと、やむを得ざる事もあらん。

從來、日本文典に於て、品詞を八種に區別せるもの所謂八品詞と稱するものは、概して西洋文典の八品詞に倣ひたるものにして、我が國語の性質に適合せりや否やは、殆んど彼等文典著者の願みざるところなるが如し。而して、この區別の不完全なるにも關せず、我が文法界に歡迎せられて、近頃まで維持し來れる勢力の大なるは、實に驚くに堪へたり。後、九品詞、十品詞に區別せるもの出で來て、幾分か完全の域に近づきたるが如しといへども、これとて眞に我が國語の性質に適合せるものにあらず。從來の區別にては、到底、我が國語を律すべからざるを以て、少しく進歩的態度を取りしに過ぎざるのみ。

八品詞の區別、既に吾人に満足を興ふるに足らず。九品詞、十品詞亦然り。是に於て、吾人は、遂に十八品詞の目を立つるの已を得ざるに至れり。從來の文法學者の眼より見るときは、頗る多きに過ぎて、乙は甲に攝すべく、丁は丙に收むべきが如きもあらん。吾人といへども、好んで多數の品詞を立て、敢て煩瑣の方法を他に強ひんとするものにあらず。されど、彼

にも屬せず。此にも容るべからざる性質のものを、枉げて一方に歸せしめんとするが如きは、吾人の忍ぶ能はざるところなるのみならず、斷じて學理の容さざるところなり。これによりて、吾人は、姑く十八品詞の目を立て、各、それらに屬すべき語は、彼此相異なる意義職能を有するものなることを明にし、以て、他日、これを數種の品詞に統括すべき時機の到るを待たんとす。

要するに、吾人の所見と、從來の文典著者の所見とを融和せしむべき時機は、從來の品詞を改定して、吾人の十八品詞を攝容すべき餘地を造るか、然らずんば、從來の文典著者が其の執るところの主義を棄て、吾人の所説に合同一致するか、二者その一に居らずんば、彼我の文法界に相提携する歡を得んことは、到底望むべからざるなり。

吾人の所謂十八品詞とは如何。

名詞

代名詞



- 指詞
- 動詞
- 存在詞
- 形容詞
- 連形容詞
- 特別形容詞
- 狀態詞
- 數詞
- 添詞
- 特別添詞
- 副詞
- 助動詞
- 助詞(互爾乎波)
- 接續詞

轉接詞  
感歎詞

これなり。序を逐うて、その大略を左に説述せん。

名詞

名詞は、形體あるものと、形體なきものとを問はず、總べて事物の名をいひあらはすに用ゐる詞なり。

- 人、馬、木、石、國、心、夢、光、春、夜、風、正成、出雲、
- 富士山、池月、明治、應仁之亂、名譽、競争、道德、圖書館、
- 鐵道局、日本外史、

等の如きは、いづれも名詞なり。

名詞と有形名詞と、無形名詞とに別つこと、或度までは可なれども、一歩進みて考ふるときは、その間に區別の漠然たるものあり。宇宙間に存在せる無量無數の事物中には、有形なるが如くにして無形なるも



芳賀博士云、有形、無形、固有、普通と分つこと、言語の性質よりみれば、我國語に不必要なること、げにいはいはれたるが如し。然れども論理上よりみれば、かへりて其必要はある也。この書論理的日本文典といふ以上は、むしろこの區別を精細にとくべき事と信ず。集合、物質などの名詞亦同じ。

の無形なるが如くにして有形なるもの、即ち有形とも無形とも一定したる名稱の下に攝すべからざるものも少からず。然るにありとある事物の名稱を、有形と無形との二名詞に攝して餘地なからしめんとするは到底望むべからざることにして、この區別は便宜的のものといはんより外なし。

また、名詞を固有名詞、普通名詞の二つに別つことも、或度までは可なれども、これとて決して合理的のものにあらず。或場合に於ては、固有名詞ともなり、普通名詞ともなりて、一定せざるもの多く、その間の區別頗る曖昧なるものあればなり。

要するに、我が國語の文典に於て、名詞を有形名詞、無形名詞、又は固有名詞、普通名詞に區別することは、西洋文典を模したる誤にして、よくも我が國語の性質を解せざるもの所の爲なり。西洋文典には、文法上の關係よりして、必ず此等の區別を立つることを要すれども、我が國語に於ては、さる必要更になし。この他、集合名詞、物質名詞、抽象名詞な

芳賀博士云、動詞より名詞となれるものの中、いはゆる有形名詞となるもの、歐羅巴語には少くして、國語には非常に多し。ハサミ、コホリ、ホリ、ハカリの如きこれなり。下の例のカスミも同様なり。これ等の事も、一應こゝとわられて然るべくや。

又云、動詞の助動詞を採りたる形にて、名詞となるもの「す」のみには限らず。例へば、爲換、いらしめ、などの如し。

又、来る、去るを名詞とみれば、来るべきを拒まず、去るべきを遂はずなどと同じく名詞とみんか。

どの區別を立てんとするもの、如きも、皆非なり。名詞には、左の如く諸種の語より成れるものあり。

一、動詞の連用形より成れるもの、  
遊びを好む、怒りは敵と思へ、かすみ棚引く

二、動詞の連體形より成れるもの、  
来るを拒まず、去るを遂はず、勤むるは苦しく、遊ぶは樂し

三、動詞の未定形に助動詞(ず)の添はりて成れるもの、  
言はず(嘘)、生まず(石女)

四、形容詞の連體形より成れるもの、  
善きを取り、惡しきを捨つ、白きは赤きより高尚なり

五、形容詞の語幹より成れるもの、  
源氏は白を尙び、平家は赤を尙ぶ、

六、形容詞の語幹に接尾語の添はりて成れるもの、  
高みに登る、深みに入る、悲しさに堪へず











指詞は、使用者の位地即ちその居所によりては種々に變ずるものなれば等しく代名詞の如き形を具へたれども、その性質は大に異なり、彼此同一に取り扱ふべきものにあらず。假に從來の文典家の所謂近稱中稱遠稱などの目によりていはんか。近稱と呼びしものも、使用者が従前の位地を去りて、嘗て遠稱と呼びし位地に至る時は、近稱と遠稱とは全く、その稱呼を顛倒せらるゝにあらずや。代名詞には、断じて、かゝることなし。これ、その性質を異にするところにして、隨て、その項を別つべき必要ある所以なり。但、彼此轉用の場合は別論なり。

○從來の文典に、代名詞を人代名詞、指示代名詞の二つに區別し、更に指示代名詞を事物場所方向の三つに細別せるは、適當の方法にあらず。殊に、時の代名詞を逸せるは、甚しき粗漏といふべし。又、人代名詞を自稱、對稱、他稱、不定稱に分ち、指示代名詞を近稱、中稱、遠稱、不定稱に分ちたるは、便宜的方法なるべけれども、相互の混同を免れず。あかの如きは、其の一例なり。

芳賀博士云、人を指すかれば指詞にして、たれは人代名詞とするは紛はしくは無きか。

又云、疑問といふ語の不可なるは貴説よくいはれたり。不定といはゞ差支なからん。

又、不定稱の代名詞を疑問代名詞と稱し、別に一目を立てんとするものあり。即ち、たれ、いづれ、いづこ等の如きを疑問代名詞とせんとするなり。此等の詞は、場合によりては、疑問の意をあらはすことあるを以て、しか命名せんことも、理なきにあらざるが如しといへども、たれも知らず、いづれも可なり、いづこにもなしなどいふたれ、いづれ、いづこ等には、疑問の意あることなし。疑問の意になるとならざるとは、多くはその下に接する助詞の種類と、また、その前後にある副詞又は助動詞の種類とによりて定まるものにて、代名詞、指詞、その物に疑問の意あるにあらず。隨つて疑問代名詞といふものを設くる必要もなかるべし。これを設けんとするは、西洋文典に迷ひたる謬見なるのみ。

動詞

動詞は、有意と無意とを問はず、すべて事物の動作又は事物の動作と認めらるゝものをいひ、あらはすに用ゐる詞なり。

芳賀博士云、動作と認めらるゝといふことに就いての説明あらまほし。



日は暮れかゝるにやどるべき家なし  
 よきを取りて悪しきを捨つ  
 學を修め業を習ひ公益を廣め世務を開く  
 輒政は鶴を射て賞せられたり  
 貴賤上下の別なく各その地位に安んずることを得しむ  
 の暮れかゝる(又は暮れかゝる)やどる取り捨つ修め習ひ廣め開く射  
 賞せ安んずる(安みとする)との連合して成れるもの(得の如きは、いづ  
 れも動詞なり。  
 動詞の語體を分拆して語幹と語尾とに別つ語尾には變化あり。  
 語幹とは語體の中の變化せざる部分をいひ語尾とは語體の中の變  
 化する部分をいふ例へば行くといふ語のゆ(行)は語幹にして(く)は語  
 尾なりこの語尾は言語文章の都合によりて行か行き行く行ゆの如  
 く變化すかく語尾の變化することを活用といひその活用する語  
 を活用言といふ。

動詞中には得著似糞來爲などの如き語尾の變化はなくたゞ語體そ  
 のまゝにて動詞の用をなすものあり此等をも活用言とするは聊か  
 不合理なるに似たれども他の語に準じて活用言の中に加ふるなり  
 動詞を語尾變化の形により大別して二とす一を正格活用といひ二を  
 變格活用といふ  
 正格活用に屬するものに左の五種あり  
 四段活用 (五十音圖中のカ、サ、タ、ハ、マ、ラの六行)  
 上二段活用 (五十音圖中のカ、タ、ハ、マ、ヤ、ラの六行)  
 下二段活用 (五十音圖中の各行)  
 上一段活用 (五十音圖中のア、カ、ナ、ハ、マ、ワの六行)  
 下一段活用 (五十音圖中のカの一)  
 變格活用に屬するものに左の四種あり  
 加行變格活用  
 佐行變格活用



奈行變格活用

良行變格活用

正格といひ變格といふは、一は規則正しく、一は規則正しからざるに  
よつて別ちたるにあらず、それらに屬する語數の多寡によりて、便宜  
的に區別したるものなり。

動詞は語尾の變化する形により、各其の職務を異にするを以て、その形  
に未定形連用形、中止形、終止形、連體形、既定形、命令形、名稱を附す。

この七種の名稱は、便宜的のものにして、根本的のものにあらず。

二段活用、一段活用等の動詞も、四段活用の動詞と同様に、活用の形に  
七種の名稱(未定形、連用形、中止形、終止形、連體形、既定形、命令形)あれど  
も、これも便宜的方法によれるものにして、二段活用、一段活用はその  
名の如く、二段、又は一段に活用するものならざるべからず。終止形等  
の下に添へたる引れは、良行活用を除くの外は、皆、異行の語尾にして、  
動詞その物の固有せる語尾にはあらず、他より借り來りて、自餘の活

用言と對當せしめたるものなるべし。

右の名稱は、文法家の意見によりて一定ならず。こゝに何々形例へば、  
連用形、終止形といふを、又何々言、又は、何々法、又は、何々段などといふ。  
こは同一のものに、著眼點の異なるよりして、かく種々の名稱を附し  
たるなり。即ち、言といふは語に命じたる名法といふは語の用法につ  
きて命じたる名段といふは語の排列の位地によりて命じたる名な  
り。名稱は如何にもあれ、いづれも完全なるものにあらず。此等の名稱  
を帯びたる幾多の語は、必ずしも其の名稱に適ひたる實を有するも  
のにあらざればなり。

文法家によりては、連體形を第二終止法とし、既定形を第三終止法と  
せるものあれど、非なり。連體形の語と第二終止法の語と、又、既定形の  
語と第三終止法の語とは、其の語形の同じきことは無論なれども、連  
體は連體にして終止にあらず、既定は既定にして終止にあらず。要す  
るに、語形は同じくして、其の意義職能は異なり。既に連體といふ上は、



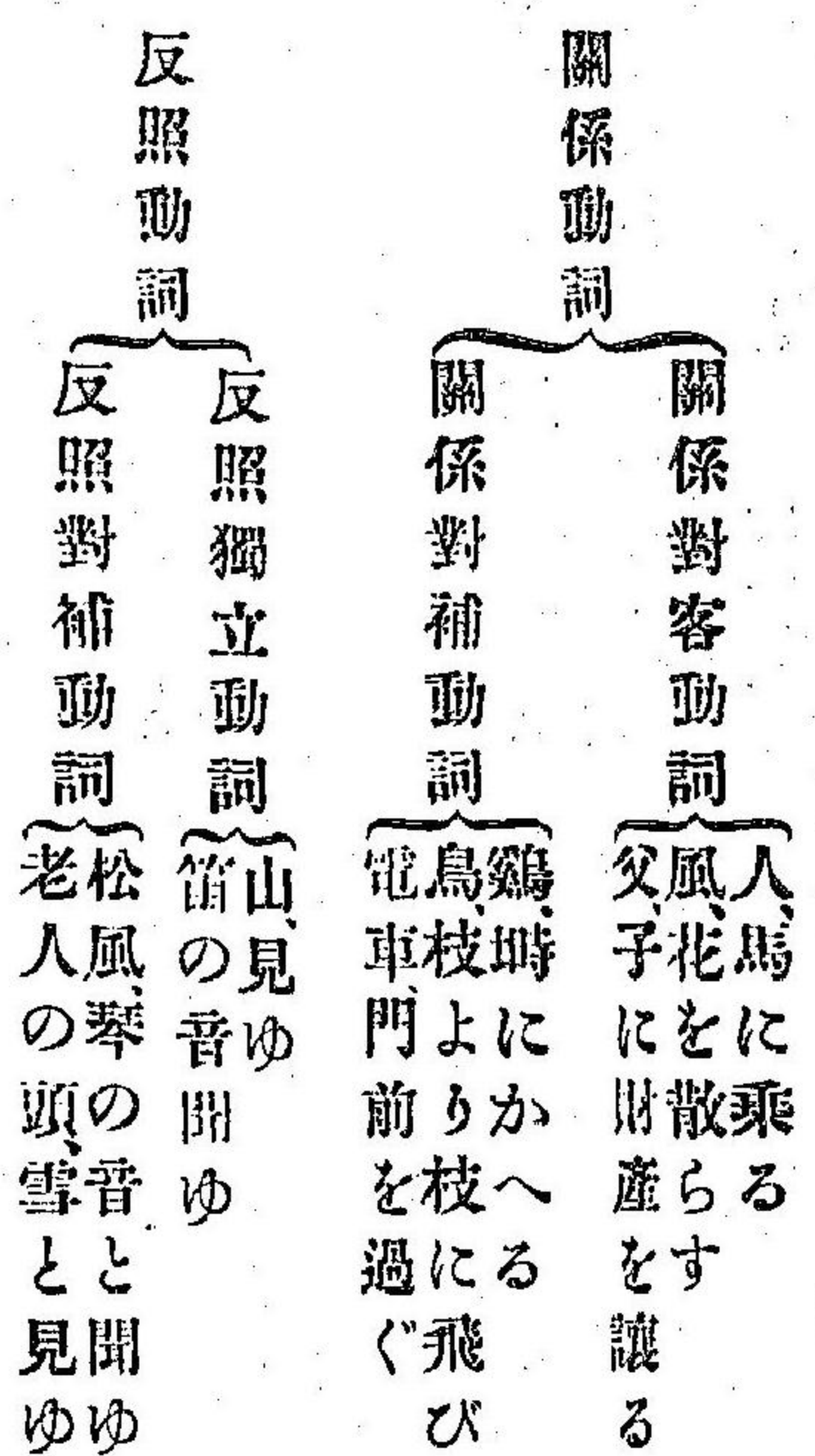
徹頭徹尾體言に連なるべきものにして、終止となるべきものにあらず。既に終止といふ上は、徹頭徹尾終止の位地を固守すべきものにして、體言に連なるべきものにあらず。既定の第三終止法に於けるも亦然り。然るにこれを混同せしむるは、全く語の意義職能を無視せるものといふべし。こは宜しく上にぞなんや、かの係詞あるときは下を連體形と同形の語を以て結び即ち第二終止法、上にこそその係詞あるときは下を既定形と同形の語を以て結ぶ(即ち第三終止法)と心得べく、二者は何處までも混すべからず。連用形の中止形に於けるも亦然り。動詞を性質によりて、次の如く區別す。



勞賃博士云、成るは單行獨立動詞ともなり、單行對補助動詞ともなり、見ゆ、聞ゆは反照獨立動詞ともなり、反照對補助動詞ともなる。かれば動詞の性質とはいふべからざるが如し。

右の區別を立つるにつきては、岡田文學士の指導に負ふところ多し。但し、こゝに列挙したるは、日本文法文章法大要に述べられたるものとは聊か其の趣を異にせるものあり。

單行獨立動詞 動作主が或動作をなし、又は或動作をなすと認めらるゝ場合に於て、他に一の對待なく、全く單行獨立の動作に出づることといひあらはす動詞を單行獨立動詞といふ。而して動作主たる事物は、敢て、生物たると、無生物たるとを問はず。





單行對補動詞。動作主のなせる或動作は、全く單行獨立にして、自身以外には、他に一の對待をも要せざれども、その動作の行はるゝ場合に於て、別に、自身と同體異名の標準を要す。かゝる場合の動作をいひあらはす動詞を單行對補動詞といふ。而して、その動作の標準となりたる語は、文の補語となるべきものなり。動作主たる事物、又は、動作の標準となる事物は、生物たると、無生物たるとを問はず。

關係對客動詞。動作主が或る動作をなすとき、他の事物に關係して、その動作をそれに與へ、又、動作に關係せる他の事物は、その動作を受くるか、又は、動作を受くと認めらるゝことあり。かゝる場合に於ける動作をいひあらはす動詞を關係對客動詞といふ。而して、動作を受け、又は、動作を受くと認めらるゝ事物をいひあらはす語即ち動詞の目的となる語は、文の客語となるべきものなり。右の場合に於ける動作主、及び、動作を受け、又は、動作を受くと認めらるゝ事物は、生物たると、無生物たるとを問はず。

關係對補動詞。動作主が或動作をなす場合に於て、その動作に對して密切に關係する他の事物を要することあり。されども、その關係する事物は、たゞ動作に關係するのみにして、その動作を受くるものにあらず。かゝる場合に行はるゝ動作をいひあらはす動詞を關係對補動詞といふ。而して動作に關係せる他の事物をあらはす語は、文の補語となるべきものなり。動作主と、關係事物とは、生物たると、無生物たるとを問はず。

反照動詞。これにつきては、文章法大要に説明せられたれば、重ねて贅するまでもなし。たゞ余の加へたるは、反照對補動詞の一項のみ。この動詞の標準となる語は、文の補語となるべきものなり。

右にいへる客語補語のことは、文章法の部に説述するところを參考すべし。また、反照動詞の解説は、文章法大要に詳かなり。

従來の文法書には、動詞を、自動と他動との二つに區別せり。この區別の不完全なることは、今更喋々するまでもなかるべし。こゝも、文章法大



要に説明せられたれば、一讀すべし。  
 大槻博士の所謂、無對自動、有對自動、單對他動、複對他動は、本論に於て何等の關係もなし。この區別の不完全なるか、ならざるか、不合理なるかならざるかは、こゝに詳論する餘地を有せず。委しくは、別著に於て説述せん。

存在詞

存在詞は、事物の存在、非存在、又は有無をいひあらはすに用ゐる詞なり。  
 教室に五十名の生徒あり

あの山には一本の木もなし

ありは存在(有)をいひあらはし、なしは非存在(無)をいひあらはす。

従来の文法家は、ありを動詞(良行變格活用)とし、なしを形容詞とせり。こゝは、意義職能の上より區別したるものにあらず。語形上よりなしたる區別なり。語を、その形によりて區別することも、文法上の一手段に

芳賀博士云、従来の文法は語形を主とし、語形上より區別したるものなれば、強に非也、誤也、不合理也とは斷言すべからず。又云、品詞の區別は、こゝ迄も論理的には押通せぬもの也。文法と論理との區別、こゝに存す。パウルの言語史に品詞區別論としてこの事を詳論せり。一讀あらんことを望む。

じて、強ひて之を非認せんとするにはあらざれども、ありは事物の動作をいひあらはす語にあらず、随つて動詞の定義に適合せず。なしは、事物の有様を形容する語にあらず、随つて形容詞の定義に適合せず。此の二語は、よろしく、動詞、形容詞より引き放ちて、別に一種の品詞として獨立せしむべきものなり。従来の文法家が、ありを動詞に屬せしめ、なしを形容詞に屬せしめたるは、非なり、誤なり、不合理なり。

存在詞の語體にも、語幹と、語尾とあること、動詞に同じ。

存在詞の活用は左の如し。

(有) ら り り る れ れ  
 (無) く く し き けれ かれ

存在詞も、語尾變化の形によりて、未定形、連用形、中止形、終止形、連體形、既定形、命令形の七種を具ふること動詞に同じ。存在をあらはすものは、動詞の良行變格活用と全く同じく、非存在をあらはすものは、未定形、命令形を除く外は、形容詞の活用とよく相似たり。右の七種の名



稱も便宜的のものにして、根本的のものにあらず。  
 存在詞といふ名稱の適否は姑く措き、我が岡田文學士が之を鼓吹せられたるは、實に文法界の一美事といふべし。往昔、富士谷氏が「あゆみ抄」に於て云々せしものなきにあらざれども、未だ整頓の域に至らず。また、權田氏が「語學自在」に於て、物の有る無きを形状言として説明せるもあれど、合理的のものにあらず。

形容詞

形容詞は、事物の性質状態分量又は感情等を形容するに用ゐる詞なり。形容詞の語體に、語幹と語尾とあること、動詞、存在詞に同じ。

形容詞を語尾變化の形によりて、二種に別つ。

第一種(久 造) く し き けれ

第二種(志久造) しく し しき しけれ

世には、右の二種の形容詞を、一種(語尾をく、し、き、けれ)にせんとする文

芳賀博士云、形容詞語幹のこと、日に名詞の章にみえたり。

又云、これも便宜

の脱き方なり。便宜上語幹とみるなり。語形の説明法としてかくいふものなれば、かくいへばとてひまじうつくしを語幹なりと主張するにはあらず。

又云、かかる古例みひく造もなく、久松、涼風、などの例にてよからん。又長々し、遠々しなど、重語は必ずしく、し、しき活用となることなども注意を要す。

法家もありもし、これを一種にせんには、

第一種の語幹を 上(善) な(長)

第二種の語幹を ひ(善)久(美) う(つく)し(美)

とせざるべからず。第一種の語幹は、右の如くにて論なし。第二種の語幹に至りては、聊か不可なり。今、左に、其の不可なる例證を示さん。

日本書紀卷第五に、

このみきは我がみきならず、やまとなす大物主のかみしみき、いく

臂佐、いく臂佐。

萬葉集卷第二に、

三笠山野邊ゆく道はこきたくも、しに荒れたるか、人にあらず

に。

新勅撰集冬歌に、

暮れやすき日數も雪もひさしにふる三室の山の松の下折れ。

續古今集神祇歌に、



ひさに經て、きみ君なれと守るらし、人の國よりわが國のため。

玉葉集雜歌三に、

ひさに經てわが後の世をとへよ松、あと忍ぶべき人もなき身ぞ、

新拾遺集賀歌に、

ひさに經ん友とや君に契るらん、十かへりの松の花のさくまで、

などあるによりて見れば、ひさは語幹にして、ひさしは語幹にあらざることを明けし、あたらく「可惜」の如きも然なり。

形容詞は、語尾變化の形によりて、各、その職能を異にせるを以て、その語形に、連用形、中止形、終止形、連體形、既定形の名稱を附す。

動詞、存在詞は、語尾の變化する形に、七種の名稱を有すれども、形容詞には、未定形と命令形となきにより、名稱は五種なり。

從來の文法書に、未定形と命令形とを置きて動詞と同じ様にせるは、形容詞と助動詞と連合したるものを、單純なる形容詞と誤認せる結果なり、形容詞その物には、未定形も命令形もあることなし。

形容詞に於ける連用中止終止連體既定の名稱も、便宜的のものにして、根本的のものにあらず。

形容詞の連用形と同形の語を、副詞法として説明せる文法家あり。こは、稍可なるが如くにして、不可なり、委しは別著に述べん。

又、連體形を、第二終止法とし、既定形を、第三終止法とせるもあり。これ、語形と職能とを混じたる誤なり。動詞の條にいへるを參考すべし。

### 特別形容詞

特別形容詞は、事物の性質狀態等を形容するに用ゐる詞なり。

特別形容詞は、普通の形容詞と其の役目は異なることなけれども、この詞は語形一種(連用形、中止形)のみにて、活用なし。

特別形容詞は、主として、名詞、又は、名詞の資格ある語に、助詞の「に」又は、「と」の添はりて成れるものなり。中には、あきらかに「明に」、しづかに「靜に」、のどかに「長閑に」などの如き、形容詞の語幹の「け」が「か」に變じたるもの



に助詞(に)の添はりてなれるもの又はさむげに寒げに、あたゝかげに(暖げに)などの如き形容詞の語幹に接尾語(げ)と助詞(に)との添はりてなれるもの等あり。

愚に 稀に 詳に 哀に 紫に 黄に

明に 静に 長閑に 暖に 爽かに 緩やかに

寒げに 厚げに 悲しげに うれしげに

高尚に 勇敢に 爽快に 明媚に

漠然と 幾々と 洋々と 鬱乎と

右の如きものを特別形容詞といふ。

特別形容詞は副詞とよく相似たるものにて従來の文典にはすべて副詞中に收めたり。固より副詞として用ゐらるゝ場合も少からざれども、副詞としては解し得られぬものも多かり。これ、この名を立つることの已むを得ざる所以なり。試に次の例を見よ。

月明に、星稀に、鳥鶺南に飛ぶ

芳賀博士云、「星稀に、月明なり。」  
一月明に、星稀なり。  
星稀にといへば特

山は紫に、水は明に、松は青く、砂は白し  
花は紅に、柳は緑に、春光賸蕩たり  
特別形容詞の活用形を具へたるものは、即ち次項にいふ準形容詞なり。  
此等の語を一品詞とし、且つこれに特別形容詞の名稱を與へたるは岡田文學士の創見に出づ。

準形容詞

準形容詞は特別形容詞に「あり」といふ詞の添はりて成りたるものなり。されば活用は、良行變格にて、普通の形容詞とは異なれども、その意義用法等に於ては、大抵普通の形容詞と異ならず。左に、その二三を對照して示さん。

遙なり (遙にあり)……はるけし

大さなり (大さにあり)……大さし



別形容詞にして、  
直前に「なり」とい  
はば、準形容詞なりとい  
はば、文章法など  
には混同は無き  
か。

- 速なり (速にあり) …… 速けし
- 柔かなり (柔かにあり) …… 柔かし
- 愚なり (愚にあり) …… 愚かし
- 明なり (明にあり) …… 明けし
- 静なり (静にあり) …… 静けし
- 長閑なり (長閑にあり) …… のどけし
- さわやかなり (さわやかにあり) …… さわやけし
- さやかなり (さやかにあり) …… さやけし
- 寒げなり (寒げにあり)
- 稀なり (稀にあり)
- 群なり (群にあり)
- 哀なり (哀にあり)
- 紫なり (紫にあり)
- 黄なり (黄にあり)

悲しげなり (悲しげにあり)

高尚なり (高尚にあり)

勇敢なり (勇敢にあり)

漠然たり (漠然とあり)

崢々たり (崢々とあり)

洋々たり (洋々とあり)

鬱葱たり (鬱葱とあり)

蕭條たり (蕭條とあり)

右にいへる如く準形容詞の語尾の活用は、良行變格なるが故に、未然形、連用形など七種の形を具へたること勿論なり。此等の語を一品詞とし、且つその名稱を附したるも、岡田文學士の創見なり。

状態詞

状態詞は事物の状態性質等を形容するに用ゐる詞なり。



状態詞は動詞に助詞のてと存在詞のありとの連合して約まりたるものゝ添ひて成れるものなり。

- 瘠せたり (瘠せてあり)
- 肥えたり (肥えてあり)
- 勝れたり (勝れてあり)
- ねびたり (ねびてあり)
- 富みたり (富みてあり)
- 聳えたり (聳えてあり)

状態詞の語尾の變化は存在詞のと同じく、良行變格なり。隨て未定形、連用形、中止形、終止形、連體形、既定形、命令形を具へたることいふまでもなし。

状態詞は岡田文學士の創見にかゝるものなり。

右に説述せる形容詞、特別形容詞、準形容詞、状態詞を總稱して状態言と呼ぶ。芳賀博士はこゝにいふ準形容詞を形容動詞と呼ばれたり。

芳賀博士云、助動詞の部に咲きたりのたりを助動詞と説かれたり。そのたりはこれと別物と見做さるゝが如し。こは却りて混亂を招かざるか。如何なる動詞が状態詞となるかの説明十分になくは了解し難し。

芳賀博士云、英文

法にていふパーナシブルは分詞と譯す。名詞と動詞とに跨るが如きものなればなり。特別形容詞の如きものは、形容詞にもなることあり、副詞にもなることあれば、かゝる類のものとして説くも一途なるべし。

特別形容詞、準形容詞、状態詞の職務は専ら、一般の形容詞と異なることなし。然るにこれを形容詞中に攝せざるは意義上の名と語形上の名との區別を立てたるのみならず、語の構造に於ても、彼此の間に大に差あればなり。

文法家によりては、高尙なり、洋々たりなどいふ高尙と、洋々とは名詞なりは、助詞のにと、動詞のありとの連結せるものたりは、助詞のにと、動詞のありとの連結せるものなりとのみいひて、高尙なり、洋々たりは、一括して如何なる職能を有する語なるかを説明せざるものあり。また、大槻博士は、副詞の部に於て、

「遙に、明に、靜に、ナド」に「ニ終ル副詞ハ、動詞ノ「あり」ト連ルトキ、に「ト」アト約マリテ、遙なり、明なり、靜なり、トナルコト、常ナリ、而シテ、其語尾ノ活用ハ、畧、ありニ同シ。(廣日本文典)

といひて、遙なり、明なり、靜なりは、如何なる職能を取るものなるかを説明せられず、敘述的のものにありては、兎にも角にも、添詞的のもの



に至りては説明の方法に苦まざるを得ざるべし、或人いへらく、普通の文法家が高尚なり、洋々たり明なりの如きものを一括して如何なる職能を有するものともいはざるは、全く説明する能はざるにあらず、すべて品詞を單語として説明したれば、右の如き單語にあらずるものをば説明の外に置けるなりと、これまた一理なきにあらず、されど、品詞を單語のみに限ることは、或度までに於てすべきことにして、全然、品詞を單語のみに限らんとするは、到底、不可能のことに屬す、要はその職能を主として、論すべきものなるべし。

數 詞

數詞は、事物の數量又は順序をいひあらはすに用ゐる詞なり。

柿一つ

生徒三人

日本外史卷七

文法雜誌第五號

などいふときの「三、七、五」は事物の數量、又は順序をいひあらはすも

のにして、數詞なり。

文法家中には、數詞を名詞の一種とせるものあり。そは、數詞の語形又は、位地又は、用法が名詞のと相似たるものあるによりてなるべし。されど、名詞は、事物の名をいひあらはすもの、數詞は、事物の數量、又は順序をいひあらはすものにして、二者の間には、おのづから區別の存するあり、名詞と同じきものは、數そのものゝ名にして、即ち名詞なり、數詞にはあらず。この二者を混同するは、語の意義、職能を無視するものといふべし。

數詞を構造の上より分つときは、本數詞と、助數詞との二つとなる。數量、又は、順序をあらはすは、主として、助數詞の役目なり。

二つ、五人などいふときの「つ」と、人とは助數詞にして、數量をあらはすもの、卷七、第五號などいふときの、卷、第、號は助數詞にして、順序をあらはすものなり、此等の助數詞に對して、三五七の如きを本數詞といふ。而して、本數詞と、助數詞とを總括したるものを數詞と呼ぶ。



大槻博士は順序をあらはす助數詞につきて、

或國文典には、彼西洋文典を指すに模倣して、順序數詞を立てたるもあれど、順序の意は添へたる「第」「番」「號」「目」等にありて、數詞には與からず、(廣日本文典別記)

といはれたり。されど、強ひて西洋文典に模倣したるものにあらず、研究の結果、必ず然らざるべからざるによりて、こゝに至りしなり。

數詞は、意義の上より見て、左の如くに區別することを得。

定數詞

三つ 五人 七回 第八 第百番

不定數詞

幾つ 何人 數回 若干圓 數多 僅

世には數詞を以て、全く形容詞とし、形容詞の部に取り入れて説明せる文典著者もあり。こは、例の西洋文典に迷ひたる謬見にして、我が國語の語法を解せざるもの、所爲なり。三つの柿、五人の小兒などいふ

ときの三つ、五人は、彼の數形容詞とよく相似たれども、柿三つを買ふ

小兒五人を養育すなどいふときの三つ、五人は形容詞にあらず。我が

數詞には左の如き用法あり。その意義、職能を考へ見よ。

柿三つ 三つの柿 柿三つあり 三つ柿を買ふ

柿三つ買ふ 柿三つを買ふ 柿の三つを買ふ

柿を買ふこと三つ 柿も三つ、梨も三つなり

これによりて見れば、主語的數詞、添詞的數詞、敘述的數詞、等あるが如し。尙、委しくは別著に於て説述せん。

添詞

添詞は名詞、代名詞、又は名詞の資格ある語の上に添へて、それらの意義を修飾するに用ゐる詞なり。

添詞は動詞の連體形より成れるものあり、又は、或他の語に助詞の添はりたるものより成れるもの等あり。



添詞はもと文章法上の職能につきて命すべき名なり副詞も亦然り。されども世の文法家副詞を以て一品詞とせり。されば添詞を以て一品詞とせんも甚しき難なかるべし。

添詞の本體と見るべきは今日にては「或る」と「所謂」とならんか或るはもと有るなればその實は存在詞にして添詞の本體にてはあらねども「或る」と書けば本體と見て差支なかるべし「所謂」もいはるゝにして添詞の本體ならざるが如くなれども所謂常識所謂戦を見て矢を矧ぐものなど用ゐらるゝ時に於ては本體と見るべきものなり但し孔子の所謂仁孟子の所謂浩然の氣など用ゐらるゝ場合に於ては異なりよろしく混合すべからず。

- 走る馬 歸る雁 流るゝ水
- 勉強する學生 峰の雪 紫の衣
- 十日の菊 二個の柿 この本
- その筆 5つの代 少しの水

芳賀博士の著に「或」所謂のみならず附えたり。他は文章論の論なるべし。

添詞は職能の上よりいふときは形容詞に似たり。英文典にて指示形容詞 (Demonstrative Adjective) といへるものもこの中にあり。

世にはこゝにいふ添詞を形容詞の中に加へ又は指示形容詞といふ一の品詞を立てんとするものありこれ洋癖に陥りたる謬見なり我が國語の形容詞は意義の上より命じたる名にあらずして語形の上より命じたる名なり添詞は形容詞に限らず動詞にても何にてもすべて被修飾語の上においてその語を修飾するものをいふなれば彼此非常に異なることあることを知るべし。

或文典著者の中には、  
疾く走る馬 急に落つる水

などの如き走る落つるを以て分詞 (Participle) といへるものもあり如何にも西洋文典の分詞によく似たるものなりされどこゝにいふ添詞は右の分詞といふが如きものみにあらず上に列擧せる如きものをも總括せるものに命じたる名なれば分詞など一部に局したる



名稱をば探らず、故に疾く走る、急に落つるの如く副詞を取りたるものとも同じく添詞と呼ぶ。  
添詞は岡田文學士の首唱にかゝるものなり。

### 特別添詞

特別添詞は事物を指示し、總括し、又はその數量を表示するに用ゐる詞なり。

特別添詞は被修飾語の上に来らずして、下に来るを常とす。且つ、その語形は連體形ならずして、殆ど孤立せるが如き形を取りて現る。これその特別なるところなり。

皆、我が言ふことをよく聞け

各、その職務に勉勵す

大抵、國民軍に屬す

大凡、かくのごとし

の皆、大抵、大凡などは、いづれも特別添詞なり。

尙委しく説明せんに、右の特別添詞は、

汝等、皆、我が言ふことをよく聞け

人人、各、その職務に勉勵す

此等の人は、大抵、國民軍に屬す

此等、大凡、かくのごとし

の如く、上にある語を修飾せるものにて、副詞の如く、その下に来る動詞、形容詞等の意義を限定するものは、おのづから、その間に差違あることを知るべし。然るに、大抵の場合に於ては、被修飾語の略せらるることあるを以て、動もすれば副詞と見做さるゝことあり。又、文法家によりては、英文典に所謂全文の副詞 (Modal Adverb) と同一視するものもあるが如し、これもまた、似て非なるものなり。

皆の如きは、皆の人人、又は、汝等のすべてといはんが如き意義あり。皆、我が言ふことを聞けといふが如きに至りては、我が言ふことを一も



残らず悉く聞けとの意にも解せられて、副詞の如くに見ゆれども、皆は依然として、我が言ふことを修飾せる特別添詞なり。各、その職務に勉勵すの各も、各人の意にて、その職務に與り居るものは、誰も、彼も、その職務に勉勵すとの意なり。餘はこれに準じて知るべし。

この他、概率、大略、獨なども、特別添詞なり。

特別添詞は、岡田文學士の創見に係るものなり。

### 副詞

副詞は、動詞動詞句、存在詞、形容詞、形容詞句、助詞、助動詞、又は、他の副詞等の上に加へて、その意義を限定するに用ゐる詞なり。

一般の文法家が、副詞の職務を、動詞、形容詞、又は、他の副詞の意義を限定するものとせるは、英文典などの定義に倣ひたるものにして、我が副詞の職能を局限して、狹隘ならしむるものといふべし。こゝには、動詞、形容詞等に副はるものは、略し、特殊なるものを左に示さん。

たとひ惡靈恨をなすとも何程のことかあらむ

豈その宗の大恥にあらずや

泥んや人に於てをや

決して悪人と交るべからず

蓋これをいふならむ

唯かれ一人のみ

絶えず敵の動靜を偵察せり

いかでさることあるべき

右の諸例によりても、副詞の職能は、從來の文法家のいへるが如きものにあらざることを知るべし。また、文法家によりては、

心隔つな

色に出づな

春なわすれそ



の如きな副詞とせるものあり。大槻博士の如きも、その一人なり。この見解の誤なることは今更喋々するまでもなかるべし。さて、右のなを副詞にあらずとせば、他の如何なる品詞に屬せしむべきか。人によりては、助動詞なりともいひ、助詞なりともいへり。されど、その接續の方法より見ても、助詞なることは争ふべからざるが如し。これにつき、岡田文學士の説もあり。委しくは、別著に於て紹介せん。

又、遙に、明に、靜にの如くに終るものは、存在詞のありと連結して、にとあと、約りて、遙なり、明なり、靜なりとなることあり。此等を副詞として取り扱ひたる文法家もありて、副詞の用法の異例など、稱せり。ては右等の如き一の叢語となりたるもの、職能を解せざるものにて、取るに足らざる僻見なるのみ。明に、靜になどは、副詞となる場合と、特別形容詞となる場合とあり。特別形容詞の條を参考すべし。

副詞の用法につきては、文章法大要の副詞法の部を参考すべし。拙著「日本文典講義」にも、其の大要を述べおけり。

序に、一言しおくべきものあり。

朝はやく起く  
夜おそく歸る

右のはやく、おそくは、一般文法家の認めて副詞とせるものなり。如何にも。

馬はやく走る  
牛おそく歩む

の如くにいふはやく、おそくは副詞にして、彼此の間に、何等の差別なきが如くに見ゆれども、大に然らず。もしはやく起く、おそく歸るのはやくとおそくとを、はやく走る、おそく歩むのはやくとおそくと同じく副詞とせんとすれば、副詞の定義に従ひて、はやくは起くの意義を限定し、おそくは歸るの意義を限定するものと見ざるべからず。されば、朝の時刻は、如何に遅くとも起くといふ動作にして、急速ならんには、朝はやく起くといはるべく、夜は、日没して、暗くなるかならぬかに歸りても、歸るときは、歩行、即ち、その動作にして、遅緩ならんには、夜お



そく歸るといはるべき理なり。かくて不可なしとせば、別に論ずべきにもあらざれども、尙も常識あるものは直に、その不可なることを發見すべし。知らず、此等の方面に向ひては、現今如何なる文法書が明確なる説明を與へたるか。

右の語には、次の如く二様の見方あり。

朝、はやく起く　　夜、おそく歸る

朝はやく起く　　夜おそく歸る

即ち、第二の方、普通の場合に用ゐらるゝものにして、第一の方は、殆んど必要のなきいひかたなるを知るべし。こゝに於ては、はやく起く、おそく歸るなどいふ如くに用ゐられたるは、はやく、おそくは、單獨に、これを副詞と見んことは、普通の場合としては不合理なることを知るべきなり。こゝに於て、

朝はやく(即ち、早朝)　　夜おそく(即ち、深夜)

は、副詞の役目を取るもの、即ち、副詞にして、はやくと、おそくとは、寧ろ、

朝と夜とにかゝるべき形容詞の、一時その位地を顛倒して、これがために、その語形を變じたるものとすべし。

尙、序にいはん、

花 美しく 咲く

水 清く 流る

風 寒く 吹く

などいふ、美しく、清く、寒くは、世の文法家中にも議論あれども、これは岡田文學士の所謂後述語副詞なり。この稱は、品詞として命ずべきものにあらず。文章法上の職能に對して附すべき名なり。故にこゝには論せず。(委しくは別著に)。

助動詞

助動詞は、動詞、存在詞、形容詞、特別形容詞、準形容詞、又は、名詞、代名詞、指詞、又は、他の助動詞等の下に添へて、それらの意義を十分ならしむるに用



ある詞なり。

花美しく咲きたり

花こそ散らめ根さへ枯れめや

われにひとしき人もありけり

風の吹くなりけり

これを知れるもの四五人なりき

昨日こそ早苗取りしか

君君たらずとも臣臣たらざるべからず

われならぬ人も世にやある

右の文中なるたりめけりなりきしかたらざるべからずなりぬ等は

いづれも助動詞なり。

助動詞は動詞存在詞等の如く語幹と語尾とを有す。

語體 語幹 語尾

せり せ らり り る る れ

べし べ く く し き けれ

語尾の變化によりて、未定形、連用形、中止形、終止形、連體形、既定形、命令形を有し、それ／＼相當の職能を取ること、一般の文法書にいへるが如し、但し、命令形には、別によを要するものあり。

右の七種の語形に命じたる名稱は、便宜的のものにして、根本的のものにあらず。

助動詞の語尾變化の形は、動詞に似たるものと、形容詞に似たるものとあり、たりけりなりせりの如きは動詞にべしごとし、まじの如きは形容詞に類せり。

助動詞の相又は法を論ずる點に至りては、文法家の所見一致せず、左に岡田文學士の説を紹介せん。

能相

この事は一日中になし終へらる

なほ、一里位は行かるべし



芳賀博士云、岡田氏は相といふ語の用法、余と異なり。岡田氏のいはゆる能相、及び、茲に引かれたる義務は余之を法と見るなり。(相の中に加へたるに非ず。)

被相

友人に誘はる

敦盛は、熊谷に打たれぬ

使役相

生徒に書物を讀ませ

放課後は十分遊ばしむ

被役相

毒藥を飲ませらる

二時間黙讀せしめらる

右の四項は、最も議論多きものなり。その他は、一般の文典に説くところにて、大なる不都合はなし。芳賀博士は、別に、

義務

書くべかりき

書くべからざるべき

書かざるべからざるべき

を置かれたり

能相と被相とは、

れ る るゝ るれ

られ らる らるゝ らるれ

使役相は、

せ す する すれ

させ すす すする すすれ

しめ しむ しむる しむれ

被役相は、

せられ せらるゝ せらるれ

させられ させらるゝ させらるれ

しめられ しめらるゝ しめらるれ

等の助動詞を以てあらはさるゝなり。

又云、余が相といふは主語と動詞との關係をみれば明瞭なるべし。通常の相は主語の動作なり。被相は主語の受ける動作也。役相は主語の使役命令する動作也。被役相は主語の使役命令せらるゝ動作也。岡田氏のいはるゝ能相の如きは、茲に並べて論ずべきものにあらずと信す。これは出来得べしと能力を示すものなれば也。



助動詞につきて、時を論ずるにも、文法家によりて、各異なり、中には、半過去、大過去、小過去、中過去、又は、第一過去、第二過去、又は、過去、未來など種々の名稱を附けて、これが解説を試みたるものあれども、いづれも、完全なるものにあらず。

過去 學ばしめき

過去完了 學ばしめたりき

現在 學ばしむ

現在完了 學ばしめたり

未來 學ばしめん

未來完了 學ばしめたらん

の如くにして、十分なり。

芳賀博士は、助動詞排列の順序を示されたり。こは、文法を研究するものに取りて、必要なることなれば、左に、その大要を抄録せん。  
一の助動詞及び形容動詞は、それ々の意味を有する助動詞に結び

つきて、時の差別をあらはし、又は、推量、又は、可能、又は、義務、命令等の法をあらはし、又は、打消の意を示し、又は、受身、使役、使役の受身等の作用を示すのみならず、これらの助動詞は、また、いくつも互に重り合ひて、多くのいひまはし方を得而して、これらの助動詞の重り合ふには、自ら一定の順序あり、左の如し。

(一)使役 (二)受身 (三)敬語 (四)打消 (五)完了の時

(六)普通の時 (七)指定 (八)法

もし、中途にて、慣言、用言、又は、助詞に逢ふときは、この連結の順序は、また、前に戻るなり、但し、ざりべかりの如くありを含むたる助動詞に逢ふときは、この連結の順序を紊すことあり。

尙委しくは、同博士の著、明治文典と、國語活用聯語一覽とを参考すべし。

助動詞につきては、説述すべきこと、いと多かり、そは別著に譲らん。



助詞

助詞は、語句文章の下又は中間にありて、前後の語句文章の關係を明にするに用ゐる詞なり。また、豆爾乎波略して豆爾波ともいふ。  
大槻博士は用法によりて、助詞を三類に大別し。

第一類 名詞にのみつくもの。

- (1) が の
- (2) の が つ
- (3) に
- (4) を
- (5) と (と)
- (6) へ
- (7) より (より) から
- (8) まで

第二類 種々の語につくもの。

- (9) は (は)
  - (10) も
  - (11) ぞ なむなも し
  - (12)こそ
  - (13) だに すら
  - (14) さへ
  - (15) のみ ばかり
  - (16) や か
- 第三類 動詞にのみつくもの。
- (17) は
  - (18) と(とも) ど(ども)
  - (19) に を が
  - (20) て(たて)とて(して)に(して)として
  - (21) で



② つゝ

とせられたり。

岡田文學士は、

な……を、ながら、ものゝ、ものから

等をも助詞とせられたり。意義、職能の上よりいへば、當然なるべし。

又或文典には、助詞を、

主格をあらはすもの

傾格又は客格をあらはすもの

與格又は補格をあらはすもの

處格又は奪格をあらはすもの

などに區別して説きたるもあり。こは、例の西洋文典を摸擬せる餘弊なり。英文典の三格、獨逸文典の四格などを標準として、我が國語の格を立てんとするが如きは、妄の極といふべし。

助詞につきても説述すべきこといと多かり、委しくは、別著に於て述

ふべし。

### 接續詞

接續詞は、二個又は、二個以上の語句文章を連ぬるに用ゐる詞なり。

従來接續詞として用ゐらるゝ語を検するに、多くは、他の品詞より轉來し、又は、二個又は、二個以上の品詞の連なりて、語句又は文章を接續する役目を取れるものなるが如し。

山を越え、又、水を涉りて來けり

書を読み、且、字を習ふ

茶、及び、酒は、多く飲むべからず

日本並びに、支那は、東洋の大帝國なり

人には、善きものと、惡しきものとあり

上野公園に遊びて、花を観る

の、又、且、及び、並びに、とての如きは、皆接續詞なり、及びは助詞、とては助



詞而して、並びには動詞に助詞の添はりたるものなれども、その役目は語句文章を接續するにあれば、その役目の上より見て、接續詞といはんことは敢て不可なかるべし。

一般の文法家は、

されば されども しかして しかるに しかれども

の如きものを他の及び且又以てなどと同様に取り扱へり。こは、位地の關係より見るときは、語句又は文章を接續する職能を有するが如くなるを以ての故に之を接續詞とせんとすれば、別にいふまでもなけれども、意義職能の如何を論ずるときは、決して彼此を混同すべきにあらず。畢竟かかる議論の由りて生ずるは、

(甲)接續詞はその定義の示すが如く、單に語句文章を接續するのみ  
の職能を有するものなるか。

(乙)接續詞は語句文章を接續するのみならず、併せて、その下に來る語句文章の意義をも限定すること、副詞の如くなるものなるか。

といふにあり、詳言すれば、甲は、單に語句文章を接續する職能を有するのみにして、下に來る語句文章の意義をば限定せざるものなるか。乙は語句文章を接續するが上に猶その下に來る語句文章の意義を限定する職能をも有するものなるかといふにあり。即ち、乙は、接續詞にして副詞を兼ねたるものなり。もし、接續詞が乙の如き二様の職能を有するものとせば、從來の定義は、全然これを改めざるべからず。また、乙の如き職能を有するものならずとせば、これを二種の品詞に區別せざるべからず。余の所見にては、甲の如きものをば接續詞とし、乙の如きものをば姑く、轉接詞と呼ばんとす。委しくは、次に轉接詞につきて説述するところを見るべし。

轉接詞

轉接詞は、二個又は、二個以上の語句文章を連續する場合に、上の語句文章の意を總括的に承けて、下の語句文章に連接せしめ、併せて、その下の

芳賀博士云、轉接といひて、接の字あり。接續詞の從來の定義不完全ならば、接續詞の中に二種を立てられては如何。



語句文章の意義を限定するに用ゐる詞なり。

しかして しからば されば かるがゆゑに

しかるに しかるを されど しかれども

等の如きは、いづれも轉接詞なり。

土佐日記に、

かぢとり今日風雲のけしき甚だ悪しといひて、船出さずなりぬし、  
かれどもひねもすに浪風たゝす。

とある中の「しかれども」は轉接詞なり。「しかれども」は「しかあれども」にて、「しか」は、上文の意を總括していへるなり。さて、これを承けて、「しかあれども」云々なりと、下文に、前件と反背せる現象をいひあらはせり。これによりて觀れば、「しかれども」は、接續詞の如くにして、接續詞にあらず。副詞の如くにして副詞にあらず。接續詞と副詞とを兼ねたるが如きものなり。故に、文法家によりては、これを接續副詞とも、副詞的接續詞ともいふものあり。

轉接詞を大別して二種とす。

一、順態轉接詞

順態轉接詞は、後件が前件に對して相反背せずして、順態の有様にてあらはるゝとき、其の兩者を連接せしむるときに用ゐる。

彼は病氣危篤なり、されば死ぬべし

雨甚しく降りたりき、さればこそ川の水増したるなれ

彼は熱心に勉強せざりき、かるが故に試験に落第せり

等の如し。

二、逆態轉接詞

逆態轉接詞は、後件が前件に對して相反背し、又は一致せずして、逆態の有様にてあらはるゝとき、其の兩者を連接せしむるときに用ゐる。

彼は病氣危篤なりき、されど死なざりき

雨甚しく降りたりき、然れども川の水は増さず

彼は熱心に勉強したりき、然るに試験には落第せり



芳賀博士云、この處を省く以上は、  
 ○○の接續詞の中にあるとて等しきかざるべからず。  
 著者云、この處は、岡田博士の注意によりて一日除去せんとしたれども、芳賀博士の評あるによりて、主要なる部分のみを存することせり。總を以て圖みたるものこれなり。

等の如し。

順態轉接詞は上の語句文章にいひ續けて

彼は病氣危篤なれば死ぬべし

雨甚しく降りたれば川の水増したり

彼は熱心に勉強せざるが故に試験には落第すべし

逆態轉接詞も上の語句文章にいひ續けて

彼は病氣危篤なれど死なざりき

雨甚しく降りたれど川の水は増さず

彼は熱心に勉強したるに試験には落第せり

の如くにいふこと多し。

順態轉接詞は語末にばでしてにして等の助詞を有し逆態轉接

詞は語末にどもどもにを等の助詞を有するを常とす。

轉接詞を順態と逆態とに區別したるは便宜的にして根本的に

あらず中には順態とも逆態ともいひがたきものもあり。

感歎詞

感歎詞は喜怒哀樂等すべて人情の感動する時に發する聲をあらはすに用ゐる詞なり。

感歎詞には單獨に用ゐらるゝものと他の語句の末に添へて用ゐらるゝものとあり。

單獨に用ゐらるゝもの即ち、獨立的に他語の上に置かるゝもの、

ああかしてしや

あら無慚なりや

あなかしこ

あはれ今年の秋もいぬめり

やよいづかたへ行きにけむ

のあああらあなあはれやよその他やああはやらびらややそれなどの類なり。

他の語句の末に添へて用ゐらるゝもの即ち、附屬的に用ゐらるゝも



の  
こむひしかるべき夜半の月かな

○三笠の山に出でし月かも

世の中は常にもかもな

昔の御事今のこゝちにしておぼゆるぞや

花のいろはうつりにけりな

の かな かも な ぞ や な その他 忘れじよ 我身 かなし も わが つま  
はや その 八重垣 を なき ぞ かし などの よも はや を か しの 類 なり。

大槻博士の他語の中間に用ゐるものといはれたる「取りやかはさん」  
「咲くや此の花」郭公鳴くや五月などの「や」も、附屬的に用ゐらるゝもの  
なり。

岡田文學士は、單獨に用ゐられて、感歎の意をあらはすものをば、感動  
語と呼び、獨立せる文と見做して、品詞の中に加へず、語句の末に添ひ  
て、始めて感歎の意をあらはすもののみを存して、感歎詞と呼び、而し

て、當然助詞の中に收めらるべきものとせられたり。

體言 用言

體言とは、名詞、代名詞を總稱して呼ぶ名なり。

名詞の資格を有する他の語も、體言として取り扱ふ。

用言とは、動詞、存在詞、形容詞を總稱して呼ぶ名なり。

體言は、語形の變化せざる語にして、用言は、語形の變化する語なり。さ  
れど、語形の變化せざる語を、すべて體言といふにはあらず、また、語形  
の變化する語を、すべて用言といふにはあらず。

舊派の文法家が、我が國語を體言、用言、助辭の三種に別ちしは、單に語  
形と意義とより區別せしものにして、不合理なるものなることはい  
ふまでもなし。こゝにいふ體言、用言は、從來の所謂體言、用言とは、其の  
名を同じくして、その質を異にせるものなり。

近頃の文法家中には、名詞、代名詞、數詞の三種を以て體言とせるもの



あり。こも可なるが如くにして、や、不可なり。余が所見にては、數詞は體言とすべきものにあらずと信ず。數詞が文中に於て體言の如くに取り扱はるゝは、數詞の本領にあらずして、名詞の資格を取りたる場合にあり。彼の舊派の文法家の如く、語尾の變化せざるものを以て、悉く體言とせんとならば、數詞は固より體言たるを妨げざれども、數詞の主なる職能は、單獨に、又は、或語と連合して、添詞、又は、敘述的狀態詞、又は、副詞等の役目を取るにありて、名詞、代名詞の如き獨立せる體言としての職能をば有せず。

路の右側にある五軒は商家にして、左側にある三軒は農家なり  
かの速に走る二人は男兒にして、緩く歩む三人は女兒なり

の如き五軒三軒二人三人は、連體形の語より接續し下をばといふ助詞にて承けたるところより見れば、如何にも、數詞を體言といひて不可なきが如くなれども、實は五軒と三軒との下には、家といふ語の略せられたるものにて、五軒の家、三軒の家といふべく、二人と三人との

勞賃博士云、數詞といひて、基數を數詞の中に加へざる甚だ紛し。數形容詞とか何とか名を改むる必要はなきか。  
又云、「八ツの二倍は十六也」といふときは何如。

下には、小供といふ語の省かれたるものにて、二人の小供、三人の小供といふべく、而して、五軒の、三軒の、二人の、三人のは、いづれも添詞なり。されど、家又は小供の如き體言の省略せられたる場合に於ては、五軒三軒二人三人は、いづれも名詞の資格を取りたる數詞にして、數詞より成れる名詞と見るべきものなり。即ち、意義は數詞にして、文法上の職能は名詞なり。

尙、一步を進めて論ずれば、右の五軒三人等は、或事物に特有なる軒又は人の如き助數詞を有するを以て、皮相の觀察にては、體言の如くに見ゆれども、二つ、三つ、五つ等の如き、如何なる事物をあらはすとも見られざるものによりていふときは、數詞が體言ならざることは明なるべし。

八の二倍は十六なり  
などいふときの八十六は數詞にあらず、純然たる名詞なり。右の如き理由によりて、數詞をば體言の中に加へず。



用言の中に助動詞を收むべしといふ論も、語形の變化する上よりしては、唱出せられざるを保しがたしといへども、舊派の文法家すら、これを用言中に收めずして助辭の中に收めたるほどなり、且、接續の手法より見ても、助動詞は動詞存在詞形容詞等と同一に論すべきものにあらざること明けし。

體言、用言の名稱を、文法書中に存せんとするは、他に深き理由あるにあらざり、動詞、存在詞、形容詞、狀態詞の連用形、又は、連體形を説くことに於て、その必要を認めればなり、若し、他日、連用形、連體形の名稱が、文法書中より撤去せらるゝ場合には、體言、用言の名稱も撤去せらるべきこと無論なり、されば、今日、文法書中に於て、體言、用言を説くは、合理的のものにあらずして、一時の便宜的に出でたるものとすべく、隨つて、其の意義も、範圍も、便宜的に局限せられざるを得ず。

本類 轉類

本類とは、詞の本來的品類の謂にして、或品詞が、その品詞固有の職務を取るものをいふ。

轉類とは、或品詞が、その品類を轉じて、他の品詞の職務を取ることといふ。

こゝにいふ本類とは、一般にいふ本來の品詞又は、本品と稱するもの、轉類とは、轉來の品詞、又は、轉品と稱するものと同じ。

かみ(神)ひと(人)やま(山)はな(花)等は、本來の名詞、あそぶ(遊)つる(釣)かつる(落)等は、本來の動詞、あかし(赤)ふかし(深)うつくし(美)等は、本來の形容詞にして、いづれも本類なり。

あそびを好むのあそび、つりを嫌ふのつり、うつくしきを愛すのうつくしきは、動詞、又は、形容詞の轉じ來りて、名詞の職務を取れるものにして、いづれもその品類を轉じたるもの、即ち轉類なり。

世には、源氏は白を尚び、平家は赤を尚ぶなどいふ場合の白、赤、又は、立體は長さと厚さと廣さとを有すなどいふ場合の長、厚、廣、等を



轉來の名詞と考ふるものあるが如し。  
 右は、いづれも形容詞の語幹又は形容詞の語幹に接尾語の添はりたるものにして、一見轉來のものゝ如くなれども、決して轉類にあらず。抽象的形質の名にして、純然たる名詞なり。そは「しろ」「白」「あか」「赤」又は「長さ」「厚さ」「廣さ」といひたるのみにては形容詞の役目を完うするものにあらず。このまゝの語形を有するものは形容詞といふことを得ざればなり。形容詞そのものを形容詞の語幹そのものと同一に取り扱ふべきものにはあらず。故に、こゝに轉類と稱するは、或語の、或品詞として、完全にその職務を取るべきものが、その語形を變せずして、そのまま轉じて他の品詞の職務を取ることといふなり。  
 漢語又は洋語を轉來の品詞と稱するは非なり。宜しく外來の品詞と呼ぶべし。外來の品詞とは、固有(又は、在來)の品詞に對しての名にして、上にいへる本來の品詞即ち本類に對しての名にあらず。

單語

單語とは、文中に於て、獨立して自己の地位を占め得る語をいふ。

單語の定義は岡田文學士による。尙、同學士は、

所謂名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、接續詞、互爾乎波等は、皆單語なり。所謂接頭語、接尾語は、他語に添ふにあらざれば、文中に用ゐられがたし。即ち文中にて獨立に自己の地位を占むること能はず。故に、此等は單語にあらず。

といはれたり。又、人によりては、スキャート(Sweet)氏の定義

A word may be defined as an ultimate independent sense-unit.

によりて、

單語は、極度まで分解せられたる(即ち、究竟的)獨立せる思想の單位なり。

と考ふるものあり。こは、その見るところの方面の異なるによりて、かかる見解を生じたるなり。

岡田學士云、彼は文の構造の上よりいへるもの、是は、觀念の上よりいへるものなり。兩者いづれにもあるべし。但し、兩者を合一すべからず。



熟語 附 連語 疊語

熟語とは二個又は二個以上の單語の結合して、一語となりたるものとす。

熟語は相異なりたる事物の名稱をあらはす二個又は二個以上の單語が結合して別に異なりたる一事物の名稱をあらはす語となりたるもの、言ひ換ふれば相異なりたる二個又は二個以上の概念が結合して新なる一個の概念となりたるものをいひあらはす語なり。

芳賀博士云、これにてみれば、熟語は成立ちに就いての名にて、既に熟語となりたる以上は亦一の單語となるなり。之を前の單語と並べ置かんこと誤解の恐なきか。

或文法家が酒樽、船歌、黒雲などの如きものを熟語とせるは論なし、草木、和漢、忠孝、または山、山人、我、我などの如きものを熟語とせるは非なり。熟語はその組織の如何に複雑なるにも關せず、單に一事物の名稱たるべきものにして、草木、和漢、山、山人、人等の如き一事物の名稱ならざるものは熟語といふべからず。

如上の理由によりて、サカゲル(酒樽)、フナツタ(船歌)、ハルカゼ(春風)等の如き一事物の名となりたるものをば熟語と呼び、クサキ(草木)、ワカン

(和漢)チヨウカウ(忠孝)等の如き異なりたる二個の事物の名をいひ連ねたるものをば連語と呼び、ヤマヤマ(山山)、ヒトヒト(人人)、ワレワレ(我等)の如き同じ語を疊用して、二個又は二個以上の同事物をあらはすものをば疊語と呼ぶ。その他動詞、形容詞、副詞等に於けるものも、右に准ず。

語を單語、熟語、連語、疊語などに區別することは、或度までに於てする便宜的方法にして、語の職能を論ずる文法の上に於ては、必須的のものにあらず。要するに、此等の區別は、語の組織を論理的に穿鑿せし結果より得たる一種の厄介物なり。

接頭語 接尾語

接頭語は單獨にては用をなさず、他語の頭につきて熟語を作り、こゝに始めて其の用をなす語をいふ。

接尾語は單獨にては用をなさず、他語の尾につきて熟語を作り、こゝに







か か黒し か弱し

等のさみじうたかはいづれも接頭語とすべし。

接尾語

ぶ	ばむ	ども	だつ	さぶ	がる	ら	め	ぶ	さ	げ
學者ぶる	黄ばむ	私ども	頭だつ	神さぶ	悲しがる	われら	落ちめ	ふるぶ	深さ	寒げ
才子ぶる	氣色ばむ	ものども	あらだつ	翁さぶ	おもしろがる	君ら	ひかへめ	おとなぶ	高さ	悲しげ

めく 春めく 上手めく

めかす ほのめかす 今めかす

さぶだつぶるなどは今日にては單獨にても意義あるが如くなれども本来は神さぶあらだつ才子ぶるなどいひて始めて用をなすものなればこれらをも接尾語とするなり。

接尾語には語尾の變化あるものとなきものとあり。

又或文法家の助語と稱するものも接尾語なることを忘るべからず。



### 文章篇

#### 文章法緒論

古來、續々文法書の發刊ありしにも、關せず、文章法を説きて吾人に満足  
 を與へしものは、一としてこれあらざりき。吾人が希望を滿たし、は、實  
 に、明治三十三年八月出版せられたるわが岡田文學士の「日本文法文章  
 法大要」を以て初めとす。我が文法界は此の好著を得て、實に多大の利益  
 を得たりき。然るに、その後、杳として、文章法につきて云々せるものある  
 を聞かず。且、近頃出版せらるゝ諸種の文法書を見るに、依然、從來の慣習  
 を墨守し、未だ嘗て進歩の跡の認むべきものなきは、吾人の怪訝に堪へ  
 ざる所なり。

然るに、明治三十七年十二月に至り、芳賀文學博士は、中等教科明治文典  
 を公にせられ、文章法は固より、他の方面に於ても、一新機軸を與へられ  
 たり。吾人が同書によりて、得しところ、固より少からずといへども、同書

は、もと、中等教育程度の學校教科書に充てんとて著述せられたるもの  
 なれば、同博士の胸裏に蘊蓄せらるゝ文法上の意見を悉されたるもの  
 にあらず。これ、吾人が望蜀の情よりして、聊か遺憾とする所なり。

余がこゝに云々せんとするは、別に嶄新なる學說あるにあらず。概して、  
 「文章法大要」等に説述せられたるものゝ外に出でず。されど、また、往々、そ  
 の趣を異にせるものなきにあらず。そは、既に、緒言に於て一言せるが如  
 く、現今一般に行はるゝ文法書によりて説きたるものにして、過渡期の  
 説明的態度を取りたるがためなり。

要するに、吾人の希望は、新舊兩思潮を溶化せしめ、併せて進みて、これよ  
 り以上の研究の途に上らんとする志士を勸誘し、以て、他日、一新體面を  
 あらはしたる好著の出でんことを期待するにあり。

#### 文

文とは二個又は二個以上の詞の正しく連続して、完全なる思想をいひ



あらはしたるものをいふ。

文は、二個の概念を連結せしめて、完全なる思想をいひあらはしたるものにして、その中には、思想の主題となる概念と、思想の叙述となる概念とを含有するものなり。

思想の主題となるものをあらはす部分を、文の主部といひ、思想の叙述となるものをあらはす部分を、文の述部といひ、主部と述部とを文の二大部と稱す。文は、如何に長きものにてても、如何に短きものにてても、必ず、この二大部を具有せざるべからず。

花主部 咲く述部

美主部しき鳥述部 おもしろく鳴く。

余主部は 櫻述部の花の散るを惜む。

島山主部の庄司重忠は 三日月述部といふ栗毛の太く逞ましき馬に乗りたり。

### 文の成分

文の成分とは、文を組み立つるに必須なる分子をいふ。

文の成分には、種々あり。左の如し。

一、主部 述部

こは、既に、前に説明したれば、重ねて贅せず。

二、主語 述語 客語 補語 修飾語

主語、述語は、文の主成分なり。この外に、客語、補語の、主成分となることあり。

主語は、主部中の主要語にして、述語は、述部中の主要語なり。客語、補語は、いづれも述部に屬す。

修飾語は、主語、述語、客語、補語、又は、他の修飾語の上に附く。

三、提部 副部 想部 發端部 呼部

右の提部、副部、想部、發端部は、岡田文學士の創見に係るものなり。

以上三種は、文の論理的成分なり。

岡田學士云、文章によりては、客語、又は、補語のなきこともあれば、これを主成分とはいひ難きが如し。



四言 句 節

世の文法家中には句と節とを別たずして單に句といへるものもあり。この一種は文の構成上の成分なり。右は文の成分を諸種の方面より見て區別したるものなり。その意義職能等は次々に説述せん。

言

言とは單純なる一個の概念をあらはす語をいふ。言はその構造を検するときは、一字又は一音より成れるあり、二字又は、二字以上又は、二音又は、二音以上より成れるもあり、各一様ならざれども、それが單純なる一個の概念をあらはすことに至りては、各一様なり。故に言には、單語なるあり、熟語なるあり。連語も、疊語も、文中に於ては、便宜上言として取り扱ふ。言の思想の主題となるものを主語といひ、思想の叙述をなすものを

芳賀博士云、音を上にし、字を括弧に入れんか。

芳賀博士云、複雑なる一つの概念の語、解し難し。

述語<sup>△</sup>といひ、述語の目的となるものを客語<sup>△</sup>といひ、述語の標準となり、且、その意義を助けて十分ならしむるものを補語<sup>△</sup>といひ、主語、述語、客語又は補語の上に加はりて、その意義を修飾するものを修飾語<sup>△</sup>といふ。客語、補語等の意義、職能は、後に至りて詳述すべし。

下女<sup>言主</sup> 湯に<sup>言補</sup> 水を<sup>言客</sup> 交ふ<sup>言述</sup>

若き下女<sup>言修言主</sup> 熱き湯に<sup>言修言補</sup> つめたき水を<sup>言修言客</sup> 多く交ふ<sup>言修言述</sup>

句

句とは、二個、又は、二個以上の言の連合して、複雑なる一個の概念をあらはすものをいふ。

句は、文中にありては、言と同じき資格を有す。句の文の主語の位地にあるものを主句<sup>△</sup>といひ、述語の位地にあるものを述句<sup>△</sup>といひ、客語の位地にあるものを客句<sup>△</sup>といひ、補語の位地に



あるものを補句といひ修飾語の位地にあるものを修飾句といふ。

若き下女 <sup>主句</sup> つめたき水 <sup>客句</sup> を 熱き湯 <sup>補句</sup> に 多く交ふ <sup>述句</sup>。

いと若き下女 <sup>修句</sup> 至つて熱き湯 <sup>修句</sup> に 非常につめたき水 <sup>客句</sup> を 甚だ多く交ふ <sup>述句</sup>。

句の名詞の資格あるものを名詞句、形容詞の資格あるものを形容詞句、副詞の資格あるものを副詞句、動詞の資格あるものを動詞句といふ。

節

節とは文の獨立せざるものといふ。

節は、また、章ともいふ。

節はその構造の上より見るときは主部と述部とを具有して、一個の文の如くなれども、意義に於て、又は形に於て獨立したるものにあらず。

節は文中に於ては言と同じき資格を有す。或文が他の文中に入りたる

るときも亦同じ。

節の文の主語の位地にあるものを主節といひ、述語の位地にあるものを述節といひ、客語の位地にあるものを客節といひ、補語の位地にあるものを補節といひ、修飾語の位地にあるものを修飾節といふ。

牛の歩むは <sup>主節</sup> 遅し <sup>述節</sup>。

東京は文學盛んにして、大阪は商業盛んなり <sup>述節</sup>。

余は花の散るを惜む <sup>客節</sup>。

彼は頭が痛いと云へり <sup>補節</sup>。

太郎は牧童の牛に騎りたる書を描けり <sup>修節</sup>。

節の名詞の資格あるものを名詞節、形容詞の資格あるものを形容詞節、副詞の資格あるものを副詞節といふ。

節に從屬節と獨立節との二種あり。

從屬節は又附屬節ともいふ。一文中に從屬して、主語、述語、客語、補語、修



飾語の位地に立ちて、それらと同じき職能を有するものなり。即ち、前例に示したるが如きものなり。

獨立節は他に從屬せずして、その意義の全く獨立せるものなり。

山高く、水長し。

獨立節

(文)

月落ち鴉啼き、霜天に滿つ。

獨立節

獨立節

(文)

又或獨立節の中に他の從屬節を含みたる場合に於ても、その節は全體の上より見るときは、一個の獨立節なり。

東京は文學盛んにして、大阪は商業盛んなり。

獨立節

從屬節(述)

(文)

或文法家は右の水長し霜天に滿つ、大阪は商業盛んなりの如きものをも節(獨立節)としたれども、これらは純然たる文にして、節にはあらず。混すべからず。

節は句の中に含まるゝことあり。この場合に於ける節は、すべて修飾

芳賀博士云、修飾語なども主語の動作存在以下につきて叙述することあり。叙述といふこと、ブレザケーン、ヨシといふことについて今一層説明ありたし。

語の役目を取るものにして、一個の節としてはその用をなさず。次に來る被修飾語と連合して一の句を形づくり、一の言と同じき資格に取り扱はるゝものなり。即ち、左の如し。

余は牧童の牛に騎りたる書を見たり。

客句

節(修)

太郎の出品せる歴史書は一等賞を得たり。

主句

節(修)

主語 述語

主語は思想の主題となる語なり。

述語は思想の主題に就きてその動作存在、性質、状態等を叙述する語なり。

花咲く。

主語

述語

美しい花

主語

述語

あまた咲きたり。

主語

述語



馬主部 人述部を乗せて速く走る。述語

おのれの身の富み且貴きを願はざる人は主部 なし。述部

孔子は主部 おのれの欲せざるところこれを人に施すことなかれといへり。述部

忘れては夢かとおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとはと

いふ歌は古今集に出でたり。主部

主語は主部中より修飾語を除去したる残餘の語なり。

述語は述部中より客語補語又は修飾語を除去したる残餘の語なり。主語は單語より成れるあり熟語より成れるあり又連語より成れるあり疊語より成れるあり句より成れるものは主句節より成れるものは主節なり述語もこれに准ず。

主語は名詞代名詞又は名詞の資格を有する語より成り述語は動詞

存在詞形容詞等より成る。

客語

客語は述語のいひあらはしたる動作に關係し且動作を受くる資格を有してその動作を受くる事物又は動作を受くる資格をば有せざれども動作を受くと認めらるゝ事物をいひあらはす語なり。

風、花を客 吹く。 花、風客に 散らさる。

人、馬客に 騎る。 馬、人客に 騎らる。

太郎、牧童の牛客に騎りて笛を吹く畫客を 系がけり。

旅行者、巖々たる山客と洋々たる水客とを 跋渉す。

在原業平朝臣は 世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからましといふ歌を客 よめり。



客語は述部中の一部分にして、これに屬する修飾語を除去したる殘餘の語なり。

客語は單語より成れるあり、熟語より成れるあり、又述語より成れるあり、疊語より成れるあり、句より成れるものは、客句、節より成れるものは、客節なり、單語ならぬ客語は、客部とも呼ぶ。

客語は、名詞、代名詞、又は、名詞の資格を有する語より成る。

補語

補語は述語のいひあらはしたる動作、存在性質状態等に對して、或關係を有する事物、又は、比較の標準となる事物をいひあらはす語にて、述語のいひあらはす動作を受くる資格を有せず、又動作を受くと認めらるる事物をいひあらはす語なり。

馬車、門前を過ぐ。

國を去りて三巴遠し。

花は根に鳥は古巢にかへる。

鶯枝より枝に飛びうつる。

將軍馬に乗りて、戰場に出で立つ。

猫鼠を臺所に捕ふ。

孔子は、おのれの欲せざるところ、これを人に施すことなかれといへり。

予は、山高く、水長く、四時の風景最も佳なる地に住む。

補語は、述部中の一部分にして、これに屬する修飾語を除去したる殘餘の語なり。

補語は、單語より成れるあり、熟語より成れるあり、又、連語より成れるあり、疊語より成れるあり、句より成れるものは、補句、節より成れるものは、補節なり、單語ならぬ補語は、補部とも呼ぶ。

補語は、名詞、代名詞、又は、名詞の資格を有する語より成る。



○客語にして補語補語にして客語の如くに見ゆる語、即ち客語とも、補語とも人々の意見によりては、一定しがたき語も少からず。此等の間に嚴格なる區別を立てんことは、決して容易の業にあらず。もし然せんとならば、文章法大要に述べられたるが如き方法を取るか。然らずんば、別に他の方法を求むるか。從來の如き方法にては、到底満足を得んこと難かるべし。故に、こゝには、姑く便宜によりて、從來の名稱を用ゐ、其の定義に、聊改訂を施したるのみ。豈これを以て文法上に一新機軸を與へたりといはんや。委しくは別著に述べなければれども、先づ次に説述するところを一讀せよ。

客語と補語との辨

客語と補語との如何なるものなるかは、大略上に説述せるが如し。されども、今日文法上に於ける難問題中には、客語と補語との區別も、實に、その一を占む。吾人、豈多少の辨を費さざるべけんや。

從來の文法家中には、或語の下に助詞のを有する語を客語とし、助詞の「に」「と」「より」等を有する語を補語とせるものあり。また、彼此の區別なく、標準語として、單に客語と呼べるものあり。甚しきは、彼の西洋文典の所説を、そのまゝ、襲用せるものありて、何れに適従すべきか。讀者をして、殆んど、五里霧中に迷はしめたりき。これ然しながら、この弊は、斯學の研究に伴ひ、不合理なるものは、漸次打破せられ、多少整頓の緒に就きたるが如しといへども、今日猶その餘弊を墨守せるものなきにあらず。わが岡田文學士、夙に此に見るところあり。特に文章法につきて、その所説を公にせられたり。委しくは、載せて、文章法大要にあり。今、これにより、傍余が卑見を加へて、聊左に説述せんと欲す。

客語はその定義の示すごとく、述語のいひあらはしたる動作に關係し、且動作を受くる資格を有して、その動作を受くる事物、又は動作を受くる資格をば有せざれども、動作を受くと認めらるゝ事物をいひあらはす語ならざるべからず。故に客語は、位地を轉じて、主語の位地に置き以



前の主語を客語の位地に轉置したりとも、その動作をいひあらはす上に於ては、兩者の間に大なる逕庭なく、恰も同一物體を正面と背面との兩方面より觀たるが如き結果を生ず。これ岡田文學士の對部と稱せらるゝものに似て、聊か異なるものなり。對部は、生物をわらはす語に限られたれども、こゝにいふ客語は、其のいひあらはす事物は敢て、生物たると、無生物たるとを問はず、而して、又從來の文法家の所謂客語とも少しく其の趣を異にして、彼等のいふ客語と補語の或ものとを含有せるが如きものなり。

猫。鼠を 捕ふ。

兵士。馬に 騎る。

風。花を 散らす。

などいへる文中の鼠、馬、花はいづれも客語なり。これらは皆、述語のいひあらはせる動作、即ち捕ふ、騎る、散らすといふ動作に關係せるのみならず、その動作を受け、又は動作を受くと認めらるゝ事物をいひあらはし

たるものなればなり、試みに右の主客を轉換して、

鼠。猫に 捕へらる。

馬。兵士に 騎らる。

花。風に 散らさる。

などいふときは、動作主の轉換せられたるが爲めに、述語の形は變じたり、れども、同一の行爲を兩方面より説明したるものの一方面的説明たるを失はず、これ客語の客語たる所以の特徴なり。これによりて、吾人は客語を取る文の述語は如何なるものなるべきかを定むるの必要を感ず。即ち左の如し。

客語を取る文の述語は、關係對客動詞より成る。

從來の文法家は、前例中の鼠を花をの如きものを以て客語とし、馬に、猫に、兵士に、風にの如きものを以て補語とせり。又、人によりては、右の如きものをば、すべて客語とせるもあり。また、西洋文典に據りたるものは、



太郎、書物を 次郎に 與ふ。  
母、下女に 小兒を 負はす。

などいふ書物を小兒との如きを第一客語(又は直接客語)次郎に下女  
にの如きを第二客語(又は間接客語)とせり。

補語はその定義の示す如く、述語のいひあらはしたる動作、存在、性質、  
態等に對して、たゞ或關係を有するか、又は比較の標準となるのみにて、  
動作を受くる資格を有せず、また動作を受くと認められざる事物をい  
ひあらはす語ならざるべからず、而して補語の中には、客語の如く、動作  
を受くる資格を有するが如きものも、往々なきにあらざれども、そはた  
だその資格を有するが如く見ゆるのみにして、實際、その動作を受くる  
にはあらず、單に、その動作に關係するまでなり。こは、語の性質に於ては、  
岡田文學士のいはるゝ補部と全く同じきものなれども、こゝにいふ補  
語は、無生物のみに限らず、生物をあらはす語にても、定義に抵觸せざる  
限りは、敢て補語たるを妨げず、而して、また従來の文法家のいふところ

の補語とも似て非なるものなり。

某氏は 米國に 留學す。

書物は 机上に あり。

彼は 家に あらず。

旅人 東京を 去る。

馬車 門前を 通過す。

小供 大人と なる。

鷺を 鴉と いふ。

林檎 樹より 落つ。

馬 牛よりも 速し。

霜葉は 花よりも 紅なり。

今年の雪は 一昨年よりも 後れたり。

右の文中にある米國、机上、家、東京、門前、大人、鴉、樹、牛、花、一昨年等の如きは、  
いづれも補語なり。これらは皆、述語のいひあらはせる動作、存在、性質、狀



態等に對して、或關係を有するか又は、比較の標準たるものにして、此等の語を除去するときは、一文の意義に明晰確實を缺くのみならず完全なる思想たらしむることを得ず、そは、いづれも文の主成分たるものなればなり、こゝに於て、補語を取る文の述語は、如何なるものなるべきかを定むるの必要を感ず、即ち、左の如し。

補語を取る文の述語は、單行對補助詞、關係對補助詞、反照對補助詞、存在詞、形容詞、狀態詞等より成る。

從來の文法家には、右の例中にある、米國東京門前、一昨年等の如きを修飾語とせるもあり、されど、我が國語の文典にては、修飾語とすべきものにあらず、そは、右等の如き語と他の形容詞、副詞等より成りたる修飾語との文中に於ける資格を比較し、且、その有無によりては、一文の意義に如何なる關係を及ぼすかを對照して考ふるときは、兩者の間に、おのづから劃然たる區別の存するを見るべし。  
尚、文章法大要の對部補部を參考すべし。

### 修飾語

修飾語は、主語、述語、客語、補語、又は、他の修飾語の上に加へて、その意義を修飾限定するに用ゐる語なり。

修飾語は、單語より成れるあり、熟語より成れるあり、又は、連語、又は、疊語より成れるあり、句より成れるものは、修飾句、節より成れるものは、修飾節なり。

修飾語は、存在詞、形容詞、狀態詞、添詞、副詞等より成る。

修飾語は、時により、便宜に任せて、單語より成れるものは、無論、句より成れるものも、節より成れるものをも、單に修飾語と呼ぶことあり、されば、こゝに、修飾句、修飾節の名を設けたるは、その構造の上より見たる名にして、又、すべてを、單に、修飾語と呼ぶは、その機能の上より命じたる名なりと知るべし。

修飾語に二種あり、一を添詞的修飾語、一を副詞的修飾語といふ。



添詞的修飾語は名詞、代名詞、又は名詞の資格ある語の上に加へて用ゐらるゝものにして、主として、主語、客語、補語の意義を修飾するものなり。

副詞的修飾語は動詞、存在詞、形容詞、特別形容詞、準形容詞、副詞等の上に加へて用ゐらるゝものにして、主として、述語の意義を修飾するものなり。

従來の文法家は、

猫 臺所に 鼠を 捕ふ。

鹿 林に 入る。

授業は 明日より 始まる。

水 東に 流る。

顔 右に 向ふ。

などいふときの臺所、林、明日、東、右の如き位地時、方向をあらはす詞を修飾語とせるもの多し。如何にも、西洋文典の所説に従へば、しかする

337131

芳賀博士云、客語補語述部に屬するならば、これまた述部に屬せずや。さきには文の成分に就いて論じ、こゝには位置について論ず。余が疑なき能はざる所以也。

も一理あるが如くなれども、我が國語の文典に於ては、補語として取り扱ふを可とすべし。そは、文を構成するに主要なる成分にして、これらの語を除去するときは、完全なる思想とならざるものあること、前にいへるが如くなればなり。

### 提 部

提部とは、特別の必要ありて、客語又は補語に相當するものを、文の首に揚げ出したるものをいふ。

提部は、文の主部、述部の外に立つものなり。

土手に上る者は、述違警罪に處すべし。主語缺く

帝國議會は、述毎年之を召集す。主語缺く

不忍池、主詩人之を、述小西湖といふ。

上州は、述利根郡川場村でございませう。主語缺く



梅の花立ちよるばかりありしより、人のとがひる香にぞしみける。

白雲のたつたの山の八重櫻いづれを花とわきて折らまし。

世の中にあらましかばとおもふ人なきが多くもなりにけるかな。

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。

慶長十九年の冬陣、元和元年の夏陣、徳川家康が豊臣氏を滅亡せし

めたりし兩役の記録は大阪人が千載墮涙の碑銘なりけり。

我身の事は人に問へ。(主無缺)

書記官長は勅任とし、書記官は奏任とす。(主無缺)

路上の説話草裡に人あり。

假名のことは古言梯といふ書あれば之に依るべし。(主無缺)

草の花はなでしこからのほ更なりやまとのもいとめでたし、女郎

花栴檀菊のところ、うつろひたる刈萱、りんどうは枝ざしなど

もひつかしげなれど、こと花の皆霜がれ果てたるにいとほなやか

なる色あひにてさし出てたるいとをかし。

とかくいひく、て浪の立つなることうれへいひてよめる歌、ゆく

さきにたつ白波の聲よりもおくれてなかんわれやまさらん」とぞ

よめる。いと大聲なるべし。

……難波の邊におはしまして問ひたまふことは、大納言の人や船

にのりて龍殺してそが首の玉とれるとや聞く」と問はするに……

織取答へて申す、神ならねば何事をか仕うまつらん……はや神に

いのりたまへといへば……

副部

副部

副部



副部とは、思想の主部たる事物が、或動作をなし、又は存在する時、所場合、順序等を文の首にいひ添へたるものをいふ。

副部は、文の主部、述部の外に立つものなり。

副部は、文中に入りて、或助詞と連続して用ゐらるゝ時は、述語の修飾語となるものにして、即ち、副詞句に變形せらるべき性質を有するものなり。この場合に於ては、助詞の<sub>に</sub>を取るを通例とす。

一條院の御時、雪いとあもしろく降りたりける朝帝端近く出でさせたまひて、雪御覽とけるに……

永保の合戦の時、金澤の城を攻めけるに、一列の雁飛ひさりて……  
(主) (又、修)

今は昔、百濟の川成といふ繪師ありけり。

今は昔、源博雅朝臣といふ人あり。

夕月夜、潮みちくらし、難波江のあしの若葉をこゆる白波。  
(呼部(歌ニノミ云と得))

奈良の京ははなれ、この京は、人の家まだ定まらざりける時に、西の京に女ありけり。

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやんごとなききはにはあらぬがすぐれて、時めきたまふありけり。

野わき立ちて、俄にはだ寒き夕ぐれのほど常よりも思ほしいづること多くて、ゆけいの命婦といふをかはす。

風烈しく吹きて、静かならざりし夜、いぬの時ばかり、都のたつみより火出で来て、いぬるに至る。

年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず。

東に筑波あり、西に富士あり。

まづ蜂は工業者造酒家に似たり……次に蜘蛛は編物師に似たり。

……次に蜂は土木師に似たり……



右の一條院の御時雪いとおもしろく降りたりける朝永保の合戦の時、今は昔夕月夜など右傍に太き線を施したるはいづれも副部なり。

想 部

想部とは自己の感想をいひあらはす場合に於て、文の首におくものをいふ。

想部は動もすれば副部と混じやすし、副部はその下に記述せらるゝ事柄の起り又は存在する時位地場合順序等をいひあらはすものなれども、想部はその下の事柄に對して、自己の感想をいひあらはすものにて、おのづから、その間に區別あり。

想部も、文の主部、述部の外に立つものなり。

次に想部の例を示さん。

蓋し國に君あるは、猶家に父あるに同じ、君は一國の父にして、父は一家の君なり。

芳賀博士云、語句の顛倒といふこと一考めらまほし。

思ふに古の正しき史どもはなかくにかう書かむやは。

願はくは花のもとにて春死なん、そのきさらぎの望月の頃。

誠に人の一念ほどおそろしきものはなし。

びに〜(それもしかるべし)。

うへも昔の男の子は、棹は穿つ波の上の月を、船は襲ふ海の中の空をとはいひけん。

もし明日雨ふらば、かの人は來らじ。

たとひ悪靈恨をなすとも、何ほどのことかあるべきぞ。

知らず生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。

例中の右傍に線を施したるは想部にして、その下の括弧内にある語句文章は、想部の添加するものなることを示す。

發端部

發端部とは、文の首におきて、單にその發端を示すのみに用ゐらるゝも



のなり。

發端部は、或文法家の發端の接續詞として擧げたるもの(さて)そもそ  
も( )又は副詞とせるもの(凡)大(凡)などによく相似たり。されど、これ  
らを接續詞又は副詞といはんとは如何にも不合理なることにて吾  
人も夙に其の不可なることを唱へたりしが今度わが岡田文學士の  
かく命名せられたるなり。

發端部は右にいへるが如く、單に文の發端を示すのみにして下に來  
る語句文章に對しては、何等の意義をも添ふるものにあらず。即ち副  
詞などの如くに他の語の意義を限定するものにあらず。また、接續  
詞の如くに、上下の語句文章を連接するものにあらず。それらとは、  
全く其の性質を異にせるものなり。

發端部は文の主部述部の外に立つものなり。

夫れ天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客なり。

そも( )是は一所不住の沙門にて候。

芳賀博士云、これ  
らの動詞に對する  
主語は何か。

そも( )窮鳥懐に入るときは獵者も之を殺さずといへり。  
凡そ實驗をかねて學問するときには學ぶところの事能く實情に適  
し、迂濶なる失なし。  
さてその構造は單純なるも複雑なるもありて一樣ならず。  
いでやこの世の中に生れては願はしかるべき事こそ多かんめれ。  
右傍に線を施したるはいづれも發端部なり。

呼部

呼部とは呼びかけていふ事物を獨立的にいひあらはしたるものをい  
ふ。

呼部は文の主部述部の外に立つものにして從來の文法家が獨立部  
と稱せしものなり。

今年より春知りそむる櫻花散るといふことはならはざらん。  
玉の緒よたえなばたえね。



大夫殿いまだ芋粥にあかせ玉はずや。  
 いかに佐々木殿久しく見参し奉らず。  
 あの男近うよれ。  
 右傍に線を施したるは、いづれも呼部なり。

文の種類

文の種類を別つに二方面あり。一はその構造上よりするもの、一はその意義上よりするものなり。

文を構造上より分類するときは、

單文 復文 連文  
 の三種あり。

文を意義上より分類するときは、

正定文 打消文 推量文

想像文 疑念文 尋問文  
 詰問文 反動文 命令文  
 希望文 禁制文 假定文  
 感歎文  
 の十三種あり。

西洋文典に模倣せる文法家は、文を意義上より分類して、叙述文、疑問文、命令文、感歎文の四種とせり。この分類の我が國語に適するか、適せざるかは、文章法大要に説述せられたるが如し。

右の十三種の分類は、岡田文學士の分類を参考して、聊か余の卑見を加へたるものなり。

西洋文典に於ける分類は、慣習的に今日まで襲用し來れるものなれども、果して彼の國語の性質に適合せるものなりや、否や、未だ知るべからず。現にチスフィールド(Nesfield)氏の如きは、

叙述文 (Assertive).



命令文 (Imperative).

疑問文 (Interrogative).

希望文 (Optative).

感歎文 (Exclamatory).

の五種に別れたり、彼の四種に別れたるものを以て満足せざるものあることはこれによりても明に知らるべし。

世には叙述文の中には肯定、否定、想像、反動、希望、禁止等を含有せるが如くに説くものあれど、非なり。

上の如く、十三種に別ちたるものも、固より完全なるものとはいふべからず、今後精確なる研究を遂ぐるに至らば、多少加除すべきものもあるべし。

### 單文

單文とは一文中に於て、主要なる主語と、主要なる述語との文法上の關

係が唯一回成立せる文をいふ。

單文の定義は芳賀博士の説に聊か卑見を加へたるものなり、從來の如き定義にても不可なるにはあらねども、動もすれば、錯誤を生ずる恐あるを以て、こゝには取らず。

定義の文中なる主語と、述語との上に、主<sup>△</sup>要<sup>△</sup>な<sup>△</sup>るといふ添詞を加へたるは、聊か理由なきにあらず。

余は、牧童の牛に騎りて笛を吹く書を見たり

の如き文には、余と、牧童との二個の主語と、騎り、吹く、見たりの三個の述語とあり、此等は、各、その所屬、即ち文法上の關係ありて、別に、彼此相混同する恐はなけれども、かゝる文を單文と見る限りは、固より單文にして、複文にも、連文にもあらざれども、唯、漠然と、主語と、述語との關係といひたるのみにては、初學者をして疑念を懷かしむるのみならず、意外の錯誤に陥らしむることなきを保しがたし、これ、主<sup>△</sup>要<sup>△</sup>な<sup>△</sup>るといふ添詞を、主語と、述語との上に加へたる所以なり、こゝに於て、右の



文を検するに、一文中の主要なる主語と、主要なる述語とは、一見して、余(主語)と見たり(述語)となること知らるべく、これと同時に牧童(主語)と騎り(述語)と吹く(述語)とは、いづれも、一文の上に於ける主要なる主語と述語とにあらざることも知らるべし。尙、次の單文につきて考へ見よ。

余は櫻の美しきか梅の美しきかを判断することを得ず。

複文

複文とは、一單文中に節又は文を含みて、主語と述語との文法上の關係が二回又は二回以上成立せる文をいふ。

複文の定義は、芳賀博士の説と岡田學士の説とにより、傍、卑見を加へたるものなり。

複文中にある節は從屬節にして、主部の中にあることあり、又は、述部の中にあることあり。

余は牧童の牛に騎りて笛を吹くを見たりの如き文にては、余(主語)と見たり(述語)との關係あり、又牧童(主語)と騎り(述語)、吹く(述語)との關係ありて、主語と述語との關係は都合三回成立せり。この文と前に單文の例として擧げたる、

余は、牧童の牛に騎りて笛を吹く畫を見たり

といふ文との差違は、客語の位地に立てるものが、一は、節、牧童の牛に騎りて笛を吹くにして、一文中に於ける主語と述語との文法上の關係が三回成立し、一は、句、牧童の牛に騎りて笛を吹く畫にして、一文中に於ける主語と述語との文法上の關係が唯一回成立せるにあり、又單文の

余は、櫻の美しきか梅の美しきかを判断することを得ずといふを、

余は、櫻の美しきか梅の美しきかを判断する能はずとするときは、複文となる。そは、客語の位地にあるものが、一は、句にし



て、一は文なればなり。即ち

余は

櫻の美しきか

梅の美しきか

修飾語

を判断することを得ず

(單文)

余は

櫻の美しきか

梅の美しきか

修飾語

を判断する能はず

(複文)

一文中に於ける主語と述語との關係は右の例に准じて知るべし。又我が國文に特有なる形式としては左の如きものあり。

象は體大なり。

東京は人口多し。

余は學淺く識薄し。

白牛は頭髮黒し。

この藥はよき香がする。

私は頭が痛し。

彼は度量狹隘なり。

某氏は文才あり。

僕はそれを断行する勇氣がない。

此等の類いと多し。いづれも複文なり。委しくは「文章法大要」を見よ。

○序に説明しておくべきことあり。上にいへる。

牧童の牛に騎りて笛を吹く

の騎りと吹くとを述語とせるはいづれも、一の動作と見たる結果

なり。牛に騎りてを吹くの修飾語とせんとするは、騎りを一の動作

と認めざる見解より出でたるものなり。右の如きは説明の理由だ

に正しくはいふれられても可なり。

連文



連文とは節と文と又は文と文とが連合して成りたる文をいふ。  
連文中にある節は、獨立節に限る。

こゝにいふ連文は、他の文法書に、重文、又は合文など稱するものと同じきものもあり、又同じからざるものもあり。

連文中にある節、又は文は、單文の形なるもあり、複文の形なるもあり。

山高く、水長し。

秋風吹けども、木葉落ちず。

彼は病氣なれど、出席せり。

君は花の咲くを待ち、余は花の散るを惜む。

花の咲きたるは美しく、鳥の歌ふはおもしろし。

門前草深く、屋宇雨漏る。

鶯は梅花に歌ひ、蝶は菜の花の咲きたるに舞ふ。

彼方は雪降れども、此方は晴れたり。

連文に就ては、大抵の文法書に説き盡されたれば、こゝには、多言を費

さるべし。但し前に、轉接詞、又は節につきて説述せるところを参照すべし。

### 正定文

正定とは、事物、又は事物の動作、存在、性質、状態等に就きて、正面より以て定むる意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、述語の末尾を動作存在詞、形容詞、状態詞、又は、助動詞の終止形を以て結ぶにあり。

豊臣秀吉、朝鮮を伐つ。

櫻の花は、うつくし。

彼の山には、森々たる松柏あり。

白雲と見しは、峰の櫻なりけり。

正定文は、説定文とも、肯定文ともいふ。

### 打消文



打消文とは、正定文の反対にして、打消の意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、述語の末尾に助動詞の「し」「ら」等を有するにあり。

彼は善き生徒にあらず。

これにましますものは世にあらず。

花は物をこそいはね……………

打消文は、否定文ともいふ。

### 推量文

推量文とは、事物の動作、存在、性質、状態等が如何にあるかを推量する意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、述語の末尾に助動詞の「べし」「ら」等を有するにあり。

今日も雨ふるべし。

よそに見る人もあるらし。

これより大なるものもあらじ。

### 想像文

想像文とは、事物の動作、存在、性質、状態等が如何にあるかを想像する意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、述語の末尾に助動詞の「らん」「げん」「べし」「めり」等を有するにあり。

戦場の様もかくやあるらん。

來年も豊稔ならまし。

山の櫻も散りぬめり。

想像文と推量文とは、その意義も形式もよく相似たり。唯推量と想像とは、心理上の作用の異なるところあるよりして區別せるのみ。

### 疑念文

疑念文とは、事物又は事物の動作、存在、性質、状態等に就きて疑念を懐く意をあらはす文をいふ。此文の特徴は、述語の末尾に助動詞の「らん」又は「か」等の副詞を有するか、又は文中に「如何」等の副詞を含むにあり。か、



る副詞を含む場合には、文尾を連體形と同形の語を以て結ぶことあり。

これは何の花なるか。

秦か漢か將近代か。

霞か雲か、はた雪か。

行末はいかにあるべき。

### 尋問文

尋問文とは、事物又は、事物の動作、存在性質状態等につきて、不審に思ふ事などを、他に向ひて尋ね問ふ意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、述語の末尾に、助詞の「か」「や」「ぞ」等を有するにあり。

御稜は彼の山にあるか。

こは、義家朝臣の肖像なりや。

和殿は誰ぞ。

### 詰問文

詰問文とは、事物の動作、存在性質状態等に就きて、何故に然あるかと他に向ひて、其の理由を詰り問ふ意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、述語の末尾に、助詞の「か」「ぞ」等を有するか、又は、文中に「など」「何故に」等の副詞を有するにあり。かゝる副詞ある場合には、大抵、文尾を連體形と同形の語を以て結ぶ。

かくてもよしと思ふか。

などて、さる所行をばしつるぞ。

何故に彼を善人といふ。

### 反動文

反動文とは、事物の動作、存在性質状態等につきて、正面よりいひたるが如くにして、其の意の反面にかへり、反面よりいひたるが如くにして、その意の正面にかへる意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、文の末尾



又は文の中間に助詞のかはやは等を有するか又は動詞存在詞形容詞、状態詞等の未定形より助動詞の判と助詞のやと連なりたるもの即ち、判やに接したるものを文尾に有するか又は文中にいかて何、豈等の副詞を有するにあり。此の場合には文尾は連體形と同形の語を以て結ぶ。

さばかりの事、いかでか困難なるべき。

今更に何をか嘆かん。

學ばずしてあるべしやは。

### 命令文

命令文とは、他に向ひて、しかせよと命令する意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、述語の末尾に動詞存在詞、状態詞、助動詞の命令形の語を有するにあり。命令形の語には、その下に助詞のよを取るものもあり。はやく學校に行け。

學べ學べ、つとめて學べ。  
つとめて靜肅にせよ。

### 希望文

希望文とは、願ひ望む意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、述語の末尾に助動詞のたし又は助詞のなん等を有するにあり。希望の意をあらはす助詞のなんは、動詞存在詞、状態詞の未定形に接するを法とす。

一日も早く歸省したし。

梅の花はやも咲かなん。

かきくらし雨も降らなん。

希望文は、願望文とも、希求文ともいふ。

### 禁制文



禁制文とは他の行爲を禁制する意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、述語の末尾にななかれべからず等を有するか又はなを上に置き、下をそにて受くるにあり。

身をも人も恨むな。  
ゆめ人に知らるな。  
幼きものとな侮りそ。

### 假定文

假定文とは、無きをも有るが如く、有るをも無きが如くに假に設け定めていふ意をあらはす文をいふ。此の文の特徴は、文中にもし、又はせば、判ばまし、かば、ませば、ならば、等を含み、述語の末尾をまし、む、等の助動詞にて結ぶにあり。

江師の一言なからまし、かばあぶなからまし。  
世の中に絶えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。

芳賀博士云、文の性質上の種類として、かく多種に分類することは、わが探らざる所なり。文法は語の法則をいふものにして、心理學に非ざればなり。かくの如き分類は文法上の價值なきものとおもふなり。

假定文は假定文とも、假設文ともいふ。

### 感歎文

感歎文とは事にふれ物にあたりて、心に感動したることをいひあらはす文をいふ。此の文の特徴は、文中又は文末に感歎詞を有するにあり。

嗚呼、美しき花なるかな。  
今宵の月のさやけさよ。  
あな、おもしろの春雨や。

感歎文は感動文ともいふ。以上の文に、それ／＼の特徴を挙げたるは、此の分類を行ひたる根據の一方面を示さんとてなり。固より精選したるものにあらず。文の意義性質上の種類を、上の如くに區別することは、果して我が國語の性質に適合せるものなるか。又、この分類は、文法上に於て幾何の價值を有するものなるか。こゝは、一の疑問なるべし。この疑問の解決は



別著に譲り、こゝには唯彼の一にも二にも西洋文典を模倣せる分類は、我が國文の性質と相容れざるものなることを警告するに止めんとす。

係結法の規定

- 第一<sup>△</sup> 一文中に係詞あるときはその文の末尾を上に係詞に相當したる詞を以て結ぶ。
- 第二<sup>△</sup> 客語補語の位地にあるものが文にして其の中に係詞あるときは其の末尾を上に係詞に相當したる詞を以て結ぶ。
- 第三<sup>△</sup> 一文中に於て意義の輕き係詞と意義の重き係詞と重なりたるときは意義の重き方の結詞を以て其の文の末尾を結ぶ。
- 第四<sup>△</sup> 二個又は二個以上の文が懸詞又は轉接詞を以て連続せられたる場合に於ては、上文に係詞ありとも、下文には結詞を置かず。
- 第五<sup>△</sup> 文の述語の省かれて、名詞代名詞又は名詞の資格ある詞にて終

らたる場合に於ては、上に係詞ありとも、其の文の末尾には結詞を置かず。

第六<sup>△</sup> 甲の文中に乙の文の一部分を引用したる場合に於ては、其の引用したる部分の中に係詞ありて結詞なしとも、其の係詞をば甲の文の末尾にては結ばず。

附記

- 一<sup>△</sup> 命令文と希望文と、禁制文とには係詞と同形の詞ありとも、其の上には結詞を要せず。
- 二<sup>△</sup> 命令文と希望文とには、結詞と同形の詞ありとも、其の上には係詞を要せず。

係結法の規定は、文章法大要に説かれたるものによりて、聊か卑見を加へたるものなり。そは、本書中の所説に適合せしめんとてなり。尙係結法に關する詳細の説明は、別著に於てせん。



此の他文章法に属する、正序法、顛倒法、省略法、並列法、並置法、添詞法、副詞法、懸詞法、序語法、呼應法、同主、同相等の如きは、一々「文章法大要」に詳述せられて、今や吾人が卑見を挾むべき餘地なきが如し、よろしく同書を一讀すべし。

### 文の解剖

文の解剖は文を構成する詞の關係及び職能を明にする一手段たるに外ならざれば、言句節修飾語等の性質職能又は單文、複文、連文の組織をだに、よく理會せば、解剖は自然に出來得べきものなり、故に、こゝには、別に贅せず、たゞ誤りやすき二三の例を掲げて、聊か解説を試みんとす。

【一】次郎の書きたる梅花の繪は展覽會に出でたり。

右の文は單文なるか、複文なるか、はた連文なるか、文法家によりては、形容詞節を含めるを以て複文とせるものもあらん、されども、主要なる主語と、主要なる述語との文法上の關係は、唯一回成立せるのみにして、二

回成立せるものにあらず、主成分は、

繪は主語 展覽會に補語 出でたり述語

にて、主語の繪に、次郎の書きたる梅花のといふ修飾語(形容詞句)の加はりたるものなり、此の修飾語を一層細かに解剖すれば、節を含みたる句にして、

次郎の書きたる(修飾句) 梅花(述語)

となるもし、

次郎の梅花を書きたるは展覽會に出でたり

とあらば、複文なることは無論なれども、原文の次郎の書きたるといふ節は、梅花といふ語を修飾して、次郎の書きたる梅花といふ一の句を形づくり、またこの句は、助詞のを取りて、その下に來る繪といふ語を修飾し、こゝに次郎の書きたる梅花の繪といふ一の主句を形づくりたるなり、而して、句は文中にありては、言と同資格に取り扱はるゝものなれば、



たとひ、その中に節を含みたりとも、全文の上より見るときは、節は修飾語の役目を取るのみにして、文法上の關係よりいへば、殆んど節の資格をば失ひたるものといふべし。これによりて、一文を複文と見んとするは、不合理なりといはざるべからず。

【三】 人多き部屋は空気が汚れやすきものなり。

かゝる文も、往々、複文と誤認せらるゝことあり。されど、主要なる主語と、主要なる述語との文法上の關係は、唯一回成立せるのみにて、純然たる單文なり。たゞ、この文に於て、感ひやすきは、補語の上にある。こは、句より成れるものにして、即ち、

空気が汚れやすき(述語)もの

なり。今、全文を取りて、これを解剖すれば、

人(主語)多き(述語)部屋は 空気が汚れやすき(述語)もの

なり

もし、この文の形を變じて、

人多き部屋は空気が汚れやすし。

とせば、述部が節より成れるものとなりて、複文となるべし。即ち、

空気が汚れやすし(述語)

【三】 わが國には山紫に水明なる佳景多し。

右の如き文も、往々、複文と見誤らるゝことあり。そは、動もすれば、山紫にが獨立節なるが如くに見ゆるを以てなり。然れども、非なり。先づ、紫にといへる助詞のみに注意せよ。このには、下の明なるのなりの組み立てられたるに、あのにと同じきものにして、詞の連續上の都合によりて、一時原形(に)を現はしたるなり。即ち、先にいへる特別形容詞の中止形なり。依りて、假に、その位地を轉換せば、



水明に山紫なる佳景

となるべきものなり。されば山紫には水明なると同じく佳景の修飾語にして、いづれも形容詞節なり。故に右の文の組織を一層明に示すときは、

わが國には 山紫なる 佳景 多し  
水明なる

となるべし。尙、主語述語等の關係を示さんには、

わが國には 山紫に 水明なる 佳景 多し  
主部 主部 主部 主部  
句 修飾節 修飾節 主語 述語

の如くなるべし。されども、これは一般文法家の取るところの見解にして、完全なるものにあらず。そはわが國にはをわが國はと同様に見たればなり。助詞のにの添ひたると否とは詞の資格を異にすればなり。依りて更に解剖の方法を改めて、

岡田博士云、この副部は、補足部の轉倒法によりて、主部の上に行きたるものなり。

わが國には 山紫に 水明なる 佳景 多し  
副部 主部 修飾節 主部 述語

とすべし。かくするときは、全く單文の形となる。これ正當なる見解なり。(特別形容詞及び副部参照)

もし右の文を變形して、  
わが國は山紫に水明なる佳景多し。

とするときは、複文なること無論なり。

【四】風荒れ波怒れる沖にただよへる孤舟あり。

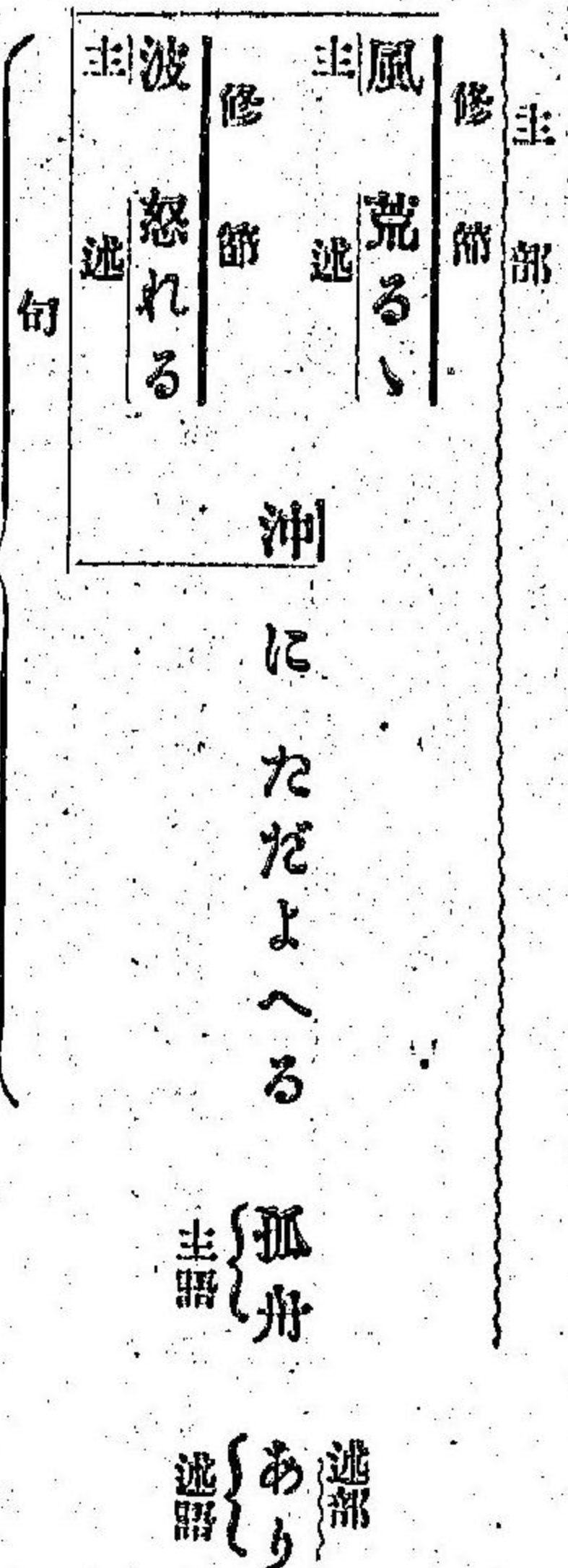
右の如き文も、文法家中には複文として取り扱ふものあり。されど、複文にあらず。純然たる單文なり。こは、たゞ、

孤舟(主語) あり(述語)

といふべきを孤舟の修飾語として風荒れ波怒れる沖にただよへるといふ句を加へたるまでなり。此の修飾語中には節の含まれたることは



無論なれども、さばらぬれも形容詞節にして、獨立せる節は、一もあることなし。全文の構造を示さば、



の如し。もし右の文中なる「ただよへるを小さきなどいふ語に代ふるときは、沖」といふには連続せざるが故に、

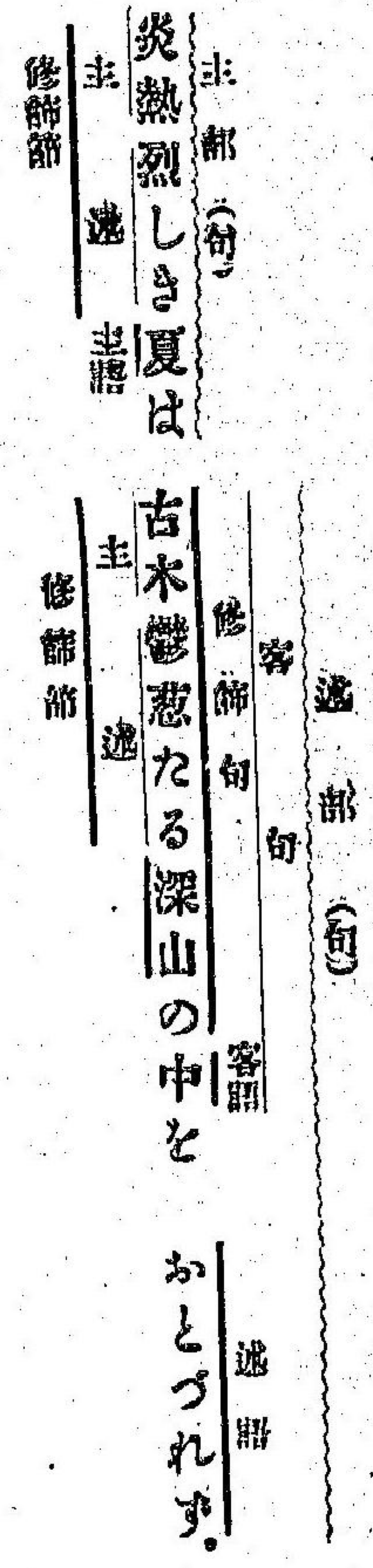
風荒れ波怒れる沖には副部となるなり。

【五】炎熱しき夏は古木鬱葱たる深山の中をとおつれず。右の如き文も、往々複文と見らるゝ傾向あり、されども複文にあらず。

副部、補足部の主部の上に行きかゝるものなり。

副部、補足部の主部の上に行きかゝるものなり。

單文なり。



即ち主語と客語と、述語とより成りたる單文の形式と同じく、主要なる主語と、主要なる述語との文法上の關係は、唯一回成立せるのみなり。以て複文にあらずることを知るべし。

【六】月も盈つれば斯け家も奢れば亡ぶ。

右の文を連文とすることは、一般の文法家に於て異存なきところなるべし。されど、これが構造を説くに至りては、或は「月も盈つれば家も奢れぬ」を以て、それらの下に來る述語の修飾語(副詞節)となすものあり。又上半及び下半を複文となし、複文の二つ連なりたる連文となすものあり。て、その歸するところ一致せざるがごとし。



月も盈つればと家も奢ればとを各一の節と見んとするは先づ可なりとせんか。されどこれらを述語の修飾語とせんとするに至りては如何にも不合理なり。もしこれらを修飾語とせんとすればその述語に對する主語は如何に省かれたりともいふべきか。またその修飾語を除去したる場合に於て残れるものは如何たり。一の述語のみならずや余の見るところにては上文は連文の省略體、下文は複文の省略體として差支なしと信ず。

月も盈つれば月も虧け家も住む人奢れば家も亡ぶ。即ち連文と複文とを連ねたる連文なり。又見方によりては上文の盈つればは述語の修飾語即ち副詞とも見らる。下文の奢ればもこれに準じて同じく修飾語とも見らるべきが如くなれども家といふ主語を人格化せざる上は不可能のことなるべし。

以上列擧せるものは一に予の所信を標準として解説したるものにして世の文法家の所見とはおのづから異なるものもあらん是非取

捨は、一に讀者諸君に委せんのみ。

論理的日本文典大意終

論理的日本文典大意終



本書に對する批評は、特に左記の  
下名に宛て、惠披あらんことを  
希ふ。

大阪市四區江戸堀

關西大學

宮脇 郁

明治三十八年十一月一日印刷  
明治三十八年十一月五日發行

日本文典大意

定價金五拾錢



校閱者 岡田正美

著作者 宮脇郁

發行者兼  
東京市京橋區北極町二番地  
篠崎純吉

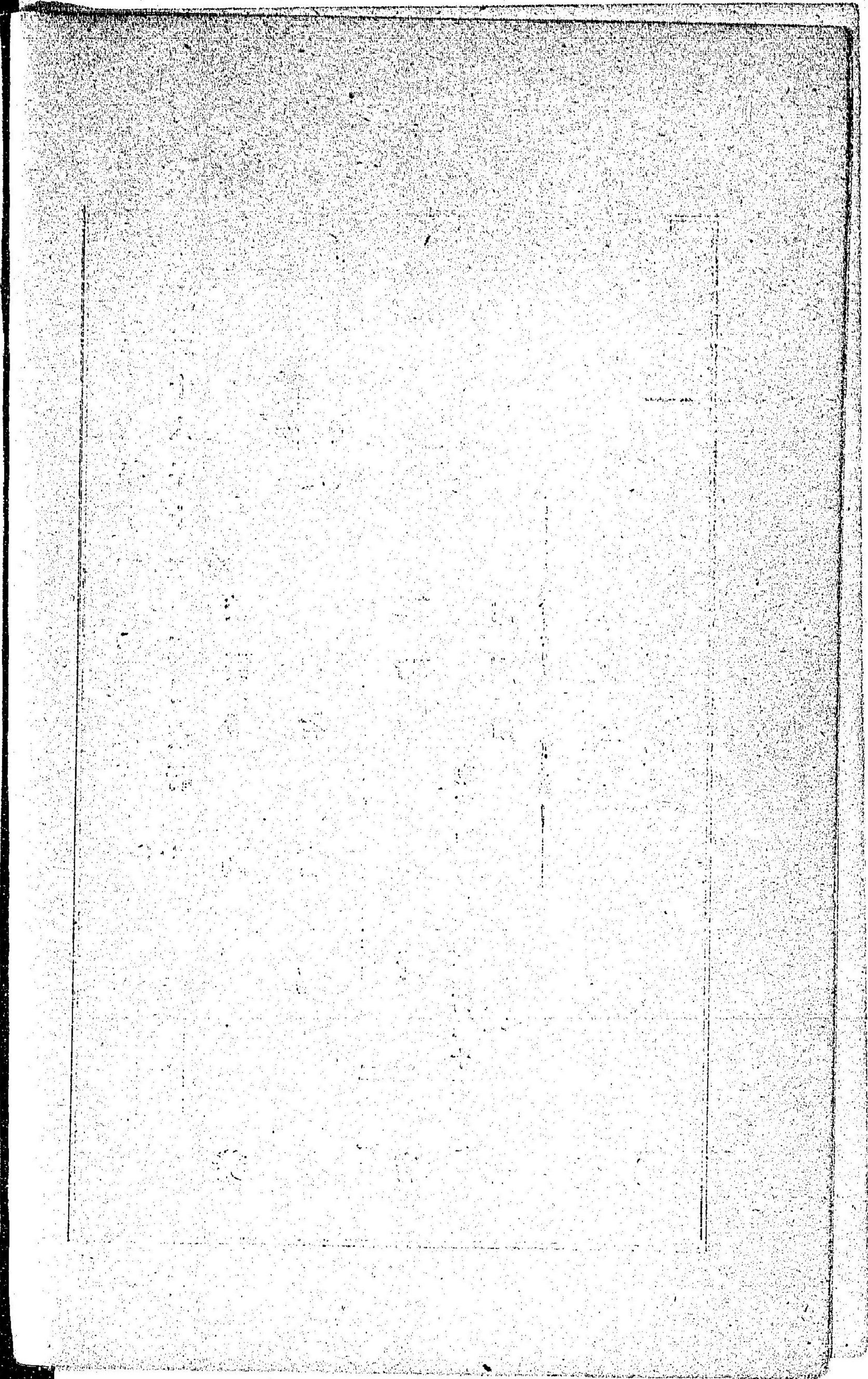
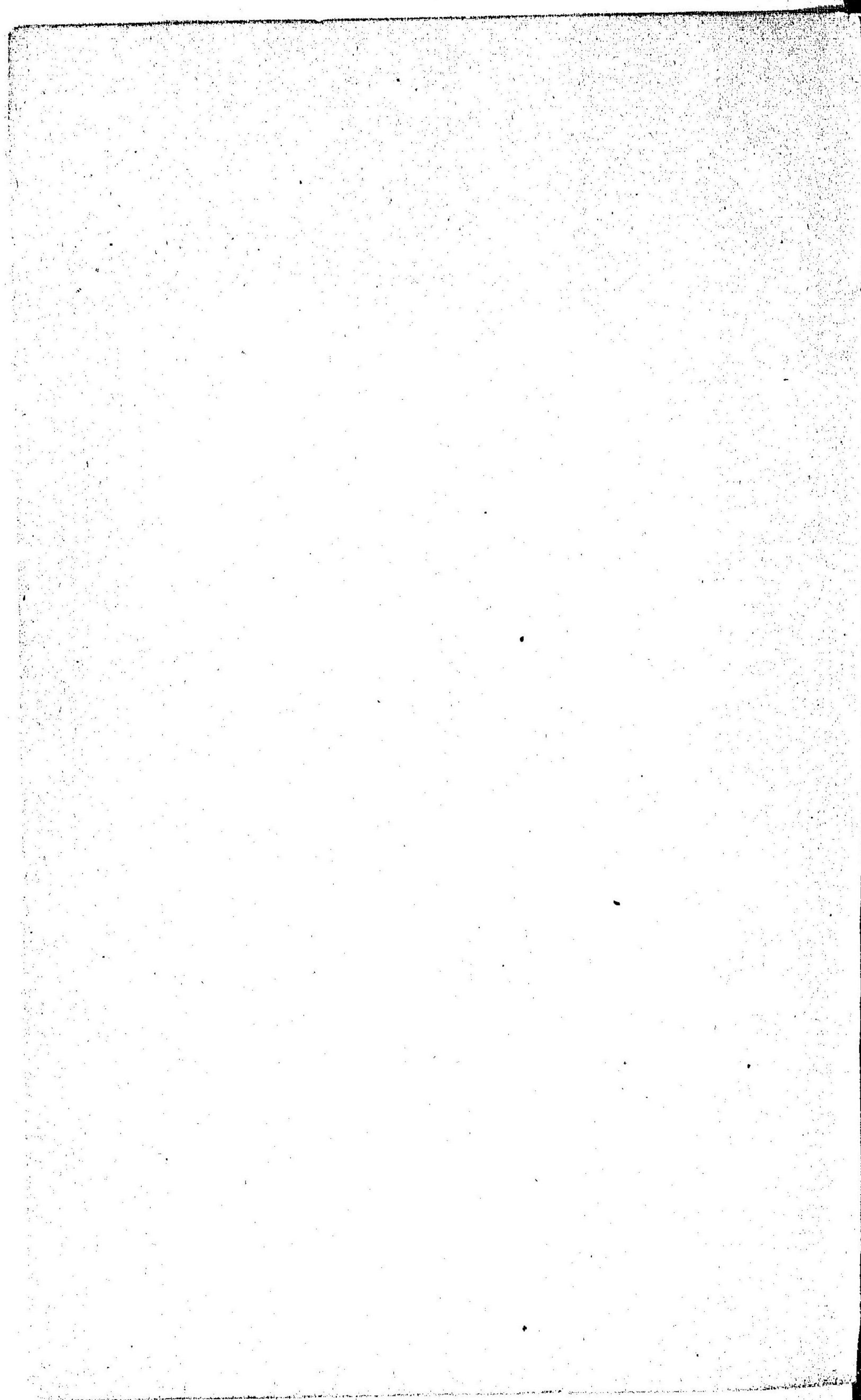
印刷所  
東京市神田區柳原河岸十二號地  
開文舍

發行所

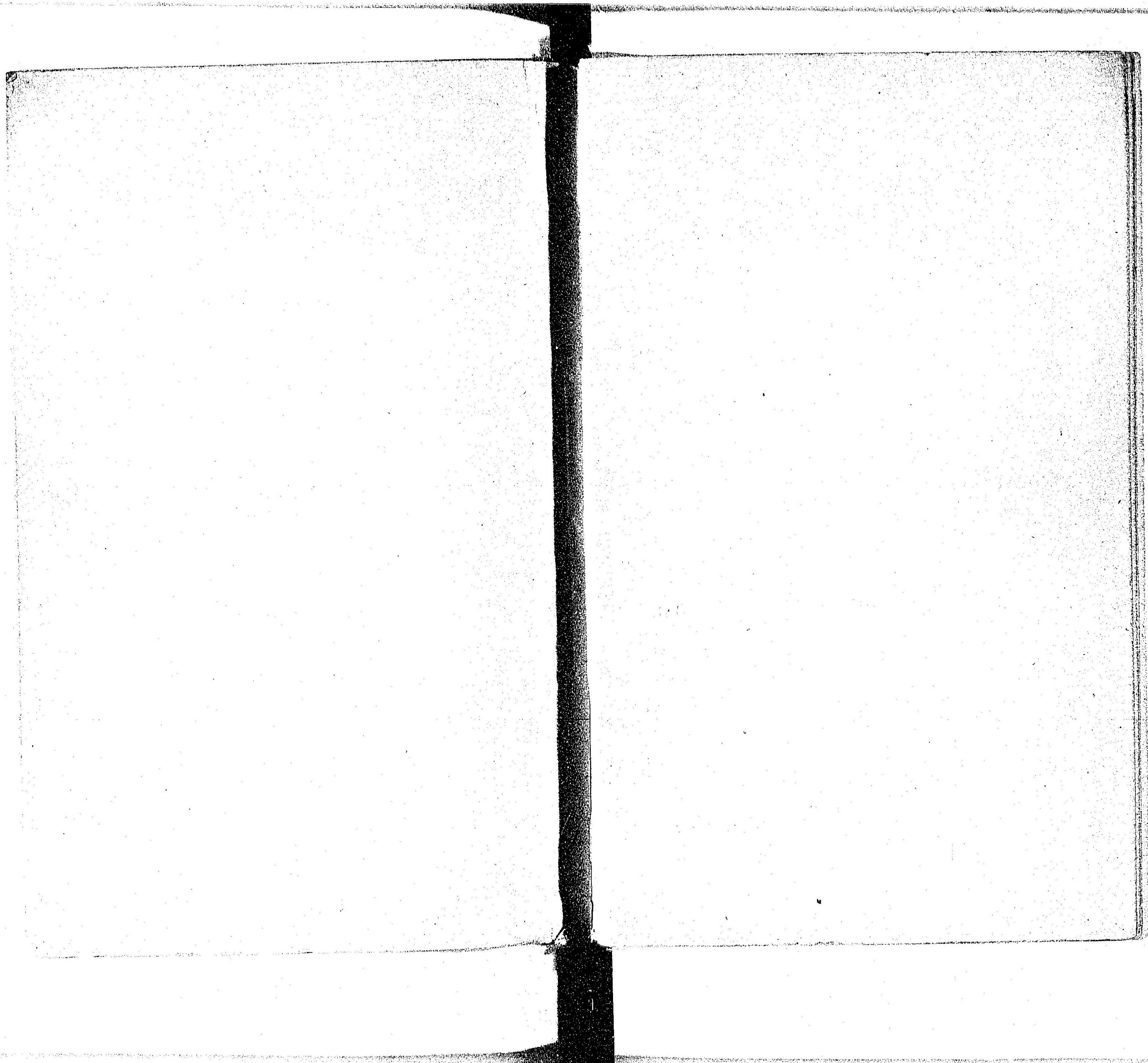
東京市京橋區北極町二番地  
(電話本局二六二二三番)  
大阪市東區南本町四丁目  
(電話東三三八四番)

參文  
積文  
舍社

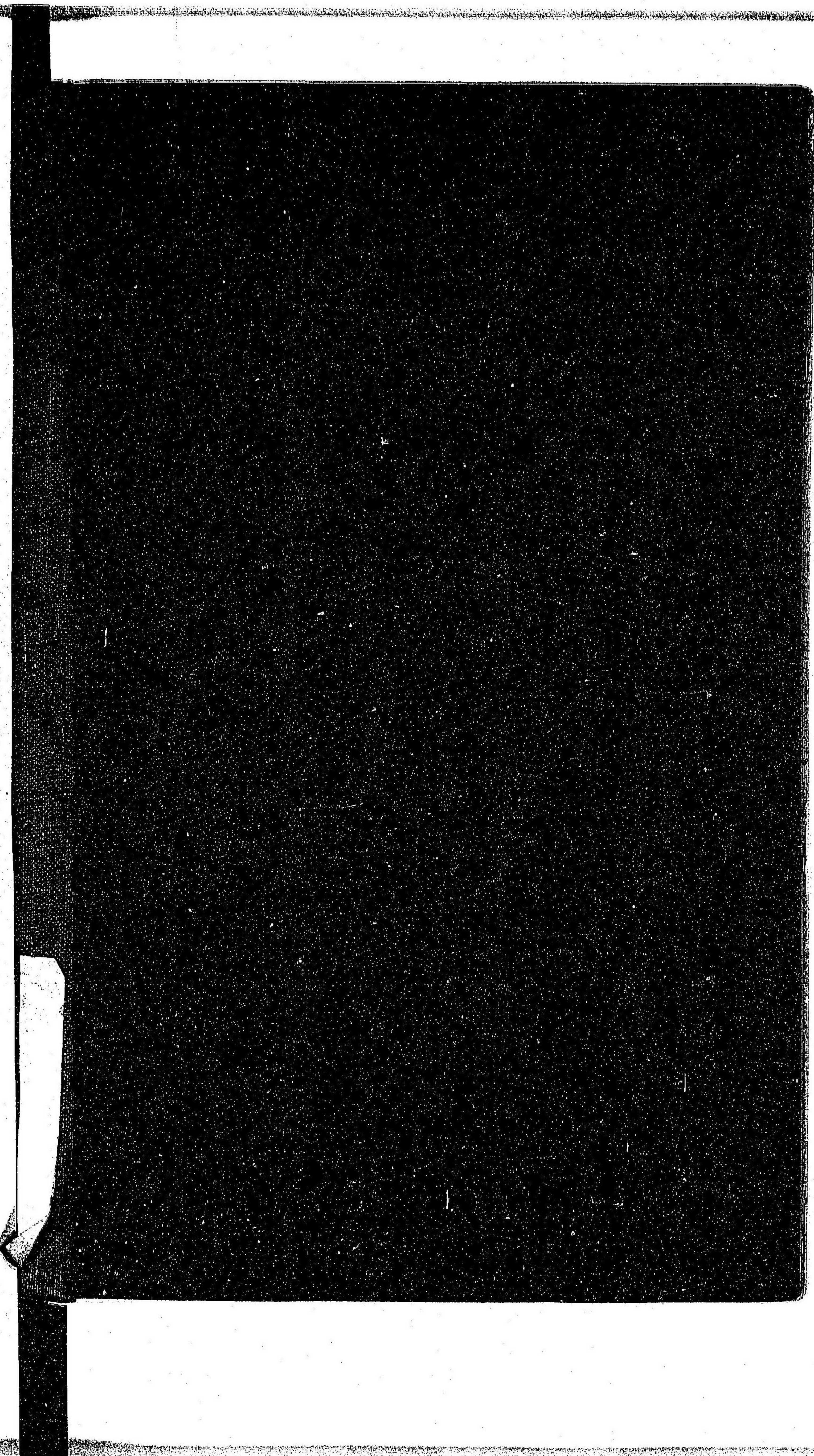














815

M661r

M

078669-000-8

815-M661r

論理の日本文典大意

宮脇 郁/著

M38

DAC-2415

